

ダークマター

shortstory : "Darkmatter" by Jun Takamoto

悲しみの重荷に悩むこの魂に教えておくれ、かの遠いエデンの苑に、

天使らがレノアと名づけた清い乙女を、わが魂の抱く日に来るかどうかを――

天使らがレノアと名づけた世に稀な光りがやくその乙女を？

鴉は答えた、『最早ない』

(E・A・ポオ 『鴉』 福永武彦訳)

*

眼を開いた瞬間に何かがあまくいつていないことがわかった。ポツドの窓にびっしりと霜がはりつき、それを通して非常灯の不吉な明りがぼんやりと見えている。ゆっくりと厚い蓋が跳ね上がると周囲の闇から冷気が一気に押し寄せてきた。身を震わせ白い息をはきながら見上げる視野のなかに赤い光に浮き上がった宇宙服がまるで悪夢のなかのグロテスクな怪物にも似た姿でゆらゆらと近づいてくる。喪服のように黒いそれが実はリッキィ――上の娘のネイビーブルーに彩られた装備であることをエリオットはどうにか見わけた。

「何があつたんだ？」

「……ベンチレーション・システムは動いていないわ。テントのなかの酸素はボンベから直接開けたもの……。汚れたら全部放出して加圧しなおさなくちゃならない」

彼女はフェイスプレートをわずかに持ち上げ早口に喋った。ようやくまわりの状況が彼にも飲み込めてきた。ポッドはすつぽり緊急用の与圧テントでおおわれている。ぴんと張った透明な皮膜が居住区画の気密性がまったたく保たれていないことをもの語っていた。

もうそれ以上質問をせずエリオットは手渡された彼自身の宇宙服に脚を通しはじめた。細かい振動と加速度から『機械』の動力シャフトが生きていることはわかる。しかももちろんそれは全員の生命と安全についてなにも意味してはいない。

「みんなは……？」

テントの内部は零下数十度まで低下して着終わるころには身体の芯まで冷えきっていた。生命維持装置が温度を上げるまでしばらく時間がかかり、彼は顎をがくがく震わせながら尋ねた。

リッキイはしかし、沈黙のまま傍らの仕切りのファスナーを引き上げ、簡易エアロックのなかに立って待っている。影になったフェイスプレートの奥から薄青色の瞳がじつと彼を見つめていた。深呼吸をひとつするとエリオットはゆ

つくり立ち上がり娘の後を追った。インナースーツは冷たく、暗闇の底は霜におおわれている。最悪の事態への予感に押し潰されそうな気持ちをつるいたてながら、エリオットは娘の後を泳ぐように追った。

遠くからでもそのポッドたちが作動していないことは見て取れた。パイロットランプは全部消え、なかに納められたものとともにそれらはいまでは居住区画の凍結した床に重々しく置かれた黒い二つの棺となっていた。すでに何をみることになるか十分知りながら、彼は小さな断熱ガラスの窓越しに中を覗き込んだ。ヘルメットの照明の放つ光のなかにまるでおだやかな眠りを眠っているような白い顔が浮かびあがる。マイア……。そしてヘンリー。……。彼の下の娘とその夫の身体は、周囲の真空と同じく冷えきった物体となっていた。

「一体なにが起こった……?」

誰か別の人間が喋っているような耳障りなささやき声が言った。

「よくわからない……突然、本当に突然。鋭くて断続な一連の音と激しいショックがあつてすぐに船内の気圧が急に低下し始めた。気密ロッカーまで行くのがやっとだった。宇宙服を着て出てみると二人のポッドの維持装置が働いていないことに気づいた。でもどうすることもできなかった」

エリオットはうなずき、相手に伝わらないことを思い出して言葉を絞り出した。

「……そうか」

「せ、船外映像のモニターを見たけれど、カメラが半分以上壊れていて状況がちつともわからなかった」

リッキイはそのときの恐怖に凍りついたような表情のまま説明した。

「架台が破損したらしく加速状態で固定されてしまって回転しない。だから『エンキドウ』を出して観測することもできなかった。でも時々小さなショックがあるのでどうやらスクープ・フィールドも対隕石防御システムも作動してないらしいことはわかった。それで重水素に切替えてシールド制動噴射を指令した。だけどシャフトにも被害があるらしく最大加速ゼロコンマ一Gが限界……」

「ジェネレーターとエンジンが両方やられたのかも知れない……」

エリオットはそう言いながら眩暈を感じ思わずポッドに寄り掛かった。

「……パパ？」

「大丈夫だ……。今の位置と速度は？」

「フィラメントC一八の中央をオリオンの腕に沿って航行中。速度は光速の九十五パーセント。十分の一Gで逆噴射を継続」

彼はマイアの側から自分を引き離すようにして管制コンソールへと移動した。椅子に崩れるように座り込みコンピュータに回線を接続する。

「外部展望！」

生き残ったモニターに外景が映しだされた。——制動のために加速度は現在『機械』の長軸に沿って働いていて、それは永遠の闇のなかに聳え立つ二万メートルの高さの塔の中腹からの眺めだった。船首方向のほぼ半分のカメラが焼きつき、見える範囲は広くはない。生き残ったモニターには準光速飛行にともなう光行差のために進行方向である船尾にかたよった星空があった。密集した星々とシールド噴射の淡いコロナを背景にしてねじ曲がった骨組みのシルエツトが浮かびあがって見える。

「ヘリウム回収装置にもダメージがある……船首の状況は何もつかめない」

エリオットはしばらく映像の列を眺めてから言った。

「破損は最大ジェネレーターの半分だけだ。……さもなければわれわれは今ここに生きてはいないからな。プラズマが流出したのが運よく船体の反対側だったのだろう」

彼は陰鬱な表情で娘を見た。

「誰かが外に出るほかないようだな」

「無理よ！」

リツキイが悲鳴に近い声をだした。

「まだ秒速二十八万四千キロ以上で、しかも……防御システムは作動してないわ！」

その速度でぶつかればたとえ芥子粒大の宇宙塵でもやすやすとヘルメットを貫通するだろう。噴射プラズマのシールドも船外作業をするなら停止しなければならない。……いま船外へ出ようとするのはほとんど自殺的行為だった。

「しかし状況を把握しなければ対策のたてようもないじゃないか？ 船体に隠れて身体を曝さないようにして……どうしても身体を晒さなければならぬなら何かを盾にすればいい」

娘はヘルメットのなかで力なく左右に首を振った。

「わたしが行く。もうこの年齢だし、多少放射線被爆しても問題じゃないからな」

「パパはここにいて。わたしが行く」

「それはだめだ」

「平気。どうせ子供の持てない身だし……」

「……その言い方はやめなさい、リッキイ」

エリオットは堅い口調で言った。

「議論している時じゃない。ともかくわたしがまず行く」

*

準光速で飛行しながらも『オー・ビー・ア・ファイニング

ール』は自由落下状態にある。シールド噴射なしでは軌道上のあらゆる粒子はミクロの隕石となって光速度の九十五パーセントで船体に激突する。しかしそれらは危険としては確率の低いものだ。彼にとって本当の脅威はファイラメントに含まれる水素イオンや進路前方の星々の光のほうだった。それらはきわめて透過力の大きい一次宇宙線やガンマ線となつて、周囲の空間に絶え間なく降り注いでいるからだ。

背負つた推進装置のうえに切断したクルーザーの外装予備パネルをくくりつけ、銀白色の甲虫にも似た姿でクルーザーの外に出たエリオットはいやでもそれを意識させられた。進行方向へかき集められて異様に変形した星空。――肉眼で見るその眺めはまるで全宇宙がとてつもない力によつてたわめられ、ついに一挙にカタストロフィーをむかえようとしているかのようだ。後方の赤外領域は悪意を秘めた巨大な闇となつて膨張し、その縁を彩る暗赤色の帯も恐ろしい何かは今にも起こりそうな印象をあたえる。彼は背中のパネルがつねに船尾方向を向くようにした。そうすれば見慣れた空がグロテスクに歪んでいるのを見ずにすむし、放射線や直径数ミリまでのサイズの粒子ならパネルの傾斜機能構造がそのほとんどを防ぎとめてくれる。……だが、それ以上の大きさの隕石については運を天にまかせるほかはない。

エリオットはエアロックの脇に浮かびながら、その姿勢のままリッキイから借りた手鏡を掲げて背後を見た。……船尾のヘリウム回収システムの被害は著しく、偏向リングそのものがめちゃくちゃにねじ曲がっている。あれを再建することはまず望めないだろう。それが意味するのはヘリウム3はクーラーに無事に残った分ですべてということだ。『グレタ』はもう二度と飛び立つことはないのだ。だが探査機のために融合燃料は必要だった。

エリオットはゆっくり漂いながらクーラーの球形の船体を巡り、船首方向にむかった。船体の陰にいるかぎり危険のほとんどは避けられる。彼は少し緊張を解き操縦区画の天窓の宇宙服姿を見上げた。スクープフィールド・ジェネレーターが停止してのちも『ファインガール』の巨大な船体に残留する磁場に螺旋状にまといつくイオンたちの悲鳴があたりに満ちていて通信は不可能だ。リッキイを安心させるように片手を上げ、エリオットはあらためて被害の調査にとりかかった。

架台のフレームはクーラーを船首方向に頭を向ける形で横だおしにしたまま動かなくなっている。あいにく探査機のハンガー扉は『ファインガール』の船体側に向いているから、それらを使えるようにするためにはまず架台を修理して『グレタ』が自由に回転できるようにしなければならない。

架台をとりまく磁気プラットホームの下を臨くと最初の穴が見つかった。直径三十センチほどで予想していたものよりも小さい。しかし衝突の瞬間生じた超高温の気体のジェットが船体のなかに噴出したことは間違いなく、それらは内部で円錐形にひろがる破壊をもたらしたはずだ。……プラットホームの一部がねじ曲がり、さらに衝突で発生した熱のために船体にしっかりと溶接されてしまっている。クルーザーの自由な回転が妨げられているのはこのためだった。しかし時間はかかるが壊れた部分を切断すれば修復は可能だとエリオットは判断した。

衝突の痕跡は大きいものだけで三個所。さらに小さな穴が無数にある。全部をふさぐことは到底不可能に見えた。……唯一幸運だったのはクルーザーの天頂方向から飛来したにもかかわらず隕石たちが居住区画そのものを直撃しなかったことだ。おかげでその真下に納められているメインコンピューターと予備発電システムも被害を免れた。まさに不幸中の幸いだ。しかし……。

エリオットの心の隅に何かひつかかるものがある。

「……どうかがおかしさ。」

無事に戻ってきた父親の姿にリッキイは見るからにほっとした様子だった。身体を晒すことになるために外部ロツカーを使わずエアロツクのなかにじかにパネルを装着した

スラストを置いて、彼は禁忌を侵すちよつとしたスリルを感じながら開いたままの船内側扉をくぐった。

「キャビンを再び与圧することはどうやら諦めなければならぬようだ。だがクルーザーの架台フレームは修理できると思う。探査機を出せば被害状況ももっと詳しく調べられるだろう」

「でも修理作業はとても危険だわ。シールド噴射したままではだめ？」

エリオットは考えた。——たとえ十分の一Gの加速度といえども物体は一分間に千八百メートルもの距離を落下する。そして微小重力はそれに慣れていくはずの人間でさえちよつと油断するとやっかい事に巻きこまれる難条件だ。

「……いや、いずれにしても大きな隕石はプラズマを突き抜けてくる。むしろ無重力で作業時間を短くしたほうが賢明だろう。……幸い修復すべき箇所はほとんどが船体の陰になっているから想像するほど大きな危険はないはずだ」

リッキイは不安そうだった。その娘の表情を見てエリオットはさきほどの船外での漠然とした妙な感覚を思い出した。

——それはなんだったろう？ 船体に穿たれた穴の形状か？ それとも数か……？ 何かが高速で衝突したことを物語るクレーターが三つ。クルーザーの小さな船体にそれだけの数の隕石がぶつかっている。……『ファイナガール』

全体ではいったいどれだけの被害があったことか？

いかに数万年を生きてきた不死のイシユタル機械といえども、これほどのダメージを受けてなお飛び続けられるものだろうか？ それを確かめる必要があった。何よりラム・スクープが破壊されたことが痛かった。現在の重水素の貯えだけではせいぜい数十箇月の十分の一G加速がせいっぱいのはずだ。それが尽きた後は無力に宇宙空間を漂うほかすべはなく星間物質や放射線の一勢攻撃を防ぐ手だてもまた失われる。——そもそもなぜ『機械』の防御システムが働かなかったのか……？

心の表層の少し下に何かがあった。しかし今彼の心はマリアを失ったショックのためか凍結しているようだった。

*

リツキイは歪んだ星空を仰いであえいだ。

無線が使えないのでエリオットは身振りでこちらに来るよう指示を送る。彼女は身震いをひとつすると彼のほうを振り向き、エアロックの縁をけるとクルーザーの陰へと回りこんだ。

手順の確認はすべてジェスチャーで行われた。——切断するべきフレームの位置と長さ。焼き切るべき外装パネルの形状と大きさ……。

それから彼らは仕事に取りかかった。すでにやるべきことはわかっていいるから作業は円滑にすすんだが、それでもフレームのひとつを切り離すまでにふたりの酸素はほとんど使い果たされた。

はじめエリオットは切り離れた鋼材は宇宙空間に投棄するつもりだったが、リッキイが目ざとく発見したものをみて気を変えた。……ライトに照らしだされるぎりぎりの彼方の薄闇に蠢いているものがある。どうやら『機械』の作業ユニットたちが船体表面に姿を現わしているらしい。

彼はスラスターの物入れから電子スコップを取り出した。波長補正された視野のなかに球形の胴体から放射状に伸びる触手が見える。赤外域のオレンジの輝きをまとって、まるで黄金色の昆虫のようだ。しかし『機械』のメンテナンスが任務のほすのそれら蜘蛛たちの作業の進めかたはどこか奇妙だった。外装の炭素結晶材を取り外そうとしているようにさえ見える。

——なるほど……皮膚移植か？

エリオットは暗然とした気持ちで了解した。プラズマで破壊された知能素材の自己再生が不充分なので無傷の部分の材料までも用いなければならぬのだろう。そこまですなければならぬほど被害は大きくまた深刻らしかった。

作業ユニットたちのほうへふたりは力を併せて切り取ったフレームを押し遣った。それはゆっくりと漂いながら船

体に平行に流れていき、やがて一台の蜘蛛のマニピュレーターにしっかりと掴まれた。……あの材質は『機械』の物質循環システムに組み込まれてわずかながらもその再生に役立つだろう。

それから幾度も船外へ出てふたりは架台の修理に取り組んだ。リッキイの工夫で通信ケーブルのターミナルが船外に設けられ、彼らは身振り手振りの会話からも解放された。もつとも互いに作業の手順は完全に了解していたし、修理そのものも順調に進んでいたから、実際にはほとんど指示や質問は必要なかった。それでもごくたまに光回線を通じて短い言葉が交されることもあった。

「あ……また光った」

「気にするんじゃない。遠雷の光でも思うことだ……」

自由落下状態での作業は確かに重量のある素材を少ない人数で取り扱うには便利な半面、また避けられないリスクを秘めてもいた。ときおり暗闇の奥で青白い閃光が瞬間的に輝き、彼らは自分たちが今置かれている恐ろしい危険についての認識を新たにした。

幾度目かに外へ出たとき、エリオットは蜘蛛たちがあまりに近くにいることに気づいて少しぎよつとなった。船尾方向、二十メートルも離れていない。作業の為に仮設した照明の光が金属光沢の装甲をにぶく輝かせていた。それら

がプラットフォームの上には決してあがってこないはずなのを知りながら、そちらへ背中を向けるとき彼はなんとなく自分が若干神経質になっているのを意識した。確かに『機械』の無機的な生命代謝の証を見ることは人間の感覚を逆撫でする何かがあるようだ。

架台の修理はほとんど終了し、最後の接続個所に補強板をあててボルト止めする作業を残しているだけだった。一人で十分できる作業だ。ただしそのためには進行方向に身体を晒さなければならず、リッキイは今回にかぎってプラズマ噴射によるシールドを主張した。

「万一ということがあるでしょう?」

しかしエリオットは気がすすまなかった。

「分厚い手袋でスパナやボルトをあつかわなければならぬ。それらを取り落としたら百分の一Gでもやっかいなことになるぞ。船体を不要に傷つけることになりかねない……やっぱり無重力状態のほうがいいだろう」

彼はパネルを二重にして背負い——そうしなければリッキイを説得できなかった——傍らの窓から彼女が心配そうに見守るなか、黙々と作業を続けた。

「あと十分以内に完了する」

ナットがひとつ手袋で鈍くなっている指から逃れた。それは毎秒数センチの初速を得、あわてて延ばした彼の手をすりぬけて恒星間宇宙へ向かってゆっくりと漂っていった。

ナットのかわりはいくらでもある。しかし少し動けば手が届く距離だった。エリオットは舌打ちし、わずかにイオンパルスの押しを加えて数メートル上昇した。そして仄かな星明りにきらめく金属片に手を伸ばす……。

——つぎの瞬間、彼は自分が『ファインガール』の船体のうえにながながとうつぶせに横たわっていることに気づいた。一瞬前まで握っていたレンチは影も形もない。奇妙な感じだった。記憶が瞬間的に完全に欠落していた……。身動きをしようとして彼は突然の激しい痛みに呻き声をあげた。

「……パパ！」

リッキイの絶叫がヘルメットのなかで響いていた。

「……どうしたんだ？」

「ああ、マシンよ、感謝します！……生きていたのね！
てっきり……」

頭が今では耐え難いほど痛んでいた。

「頭痛がひどい。……少し吐き気がする。それに……」

彼は宇宙服のうえから自分の身体を慎重に触って確かめた。

「……骨折はないようだ。だが呼吸が苦しい。どうやら胸を打つたらしい」

恐る恐る周りを見渡し、いつのまにか自分がもとの位置から十数メートル船首よりに移動していることを知って彼

は驚いた。背後にはリールいっぱい巻き出されたファイバーケーブルが延びている。身体の横にあったはずのスラスタアのハンドルは腹のほうに向って妙な形に折れまがつていた。それが意味することを理解してエリオットはぞっとした。——恐ろしい力で背後からつき飛ばされたのだ。そしてケーブルの張力によってからくも引き留められ、そのまま船体に叩きつけられたらしい。

「今行く。待っていて」

「いやー！」

エリオットは叫び、痛みをこらえ苦勞して身体の向きをかえた。

「大丈夫だ。出てくる必要はない」

こうしている間にもガンマ線は容赦なく身体を貫通しているだろう。彼は必死の努力でスラスタアを操作しクルーザーの陰へと自分の身体を運んだ。ヘルメットのなかに嘔吐するわけにはいかない。不愉快なだけではなく無重力では窒息する危険もある。そして、そこに力無く浮かんだまま彼はしばしマシンに祈った。もしも内臓にも何らかのダメージがあったら……。

やがてひどい気分は少し楽になり、どうやら打撲によるショックが致命的なものではないらしいことがわかった。彼はヘルメットの給水パイプで唇を湿らせ、呼吸を整えた。「説明してくれ。何があった?」

「すぐ後ろで作業していた蜘蛛のひとつが突然爆発したの……。そのまま吹き飛んで……もう少して触手のひとつが当たりそうだった……猛烈なスピードで回転しながら船首のほうへ消えていった」

エリオットは目を閉じた。

「……隕石だ。まさに九死に一生をひろったな！」

*

「ちょうど核融合エンジンのプラズマ噴射を至近距離からあびたようなものだ。ごく瞬間的ではあったろうけれどね」
気密ロッカーの狭い空間のなかでリッキィから脇腹のテーピングしてもらいながらエリオットは説明した。

「秒速二十八万キロメートルを超える速度で衝突すれば安定した元素も核反応を起こしうる。それらは一瞬のうちに素粒子のスープになり、つぎに電離した陽子と中性子と電子のプラズマのビームとなって拡散していく。わたしを背後から直撃したときも大部分はせいぜいミクロン単位のレベルまでしか凝縮していなかったろう。もちろん超高温だから直接浴びれば生命はなかったろうし二重のパネルを貫通するだけの大きさの破片もあったはずだ。しかしそれらは運よく逸れたらしい。……もつとも幸運と言えるかどうかはわからないな。恒星間宇宙あのサイズの質量に遭遇

すること自体確率的にはゼロに近いだろう。『起こる可能性のあるトラブルは必ず起こる』という例のマーフィーの法則はどうやら不滅の真理らしいな」

「生きた心地がしなかった」

リツキイの顔はまだ青ざめていた。

「あの蜘蛛が半分白熱しながらパパの傍らを通りすぎたときには。……きつと挟のひつつはほんの数センチしか離れていなかった」

エリオットは苦い笑いを浮かべた。

「死に方としては理想的かも知れないぞ。なんの苦痛もな
く……」

「……やめてー!」

リツキイの口調は冷たかった。

「こんなときに冗談なんて。忠告を聞き入れないで死ぬほど心配させておきながら……」

「……すまない」

彼はひびの入った肋骨に手早くテープを張り付けていく娘の真剣な表情と手付きとをしばらく見ていたが、やがて言った。

「おまえは最初のショックがあつたとき、突然、断続的な鋭い音が聞こえたといっていたね」

リツキイはちよつとの間、テープの張り具合を確かめていたが、父親の目を見てうなずいた。

「……ええ」

「幾つかの鋭い音がごく短い間を挟んで連続して聞こえた
ということだね」

「と、思うけれど……終わったわ」

「うむ……。ありがとう」

エリオットは言い、娘の手を借りて立ち上がり、ゆつくり
身体を捻ってみた。

「痛むっ」

「……いや。だいぶよくなった。だがまだ腕が自由に動か
せない。悪いが宇宙服を付けるのに手を貸してもらえら
るか?」

「はい。でも、もう少し休んでからのほうがいいと思うわ」
「そうもいかない。……もしもわたしの考えが正しいなら
残された時間があまりないんだ」

リッキイは父親のインナースーツを床から取り上げなが
ら不安な表情をした。

『『グレタ』の船体には三個所穴が開いていた。互いの間隔
は十メートルもない。クルーザーの船体の直径は三十メー
トルほどであるにもかかわらず、そんな小さな投影面積に
三つも衝突の痕跡がある。恐らくこの隕石たちの平均距離
は数百メートルからせいぜい数キロといったところだった
はずだ。……星間物質の分布密度としては異常に高いと思

わないか？」

制御卓のモニター群に目を走らせながらエリオットは言った。

「そう言われればね」

「だが、おまえは断続した衝突音を聞いているという。妙じゃないか？」

「妙？ なぜ……？」

「……いいかね。そのとき『ファインガール』は光速度の九十五パーセント以上で航行していた。もしもそんなふう
に密集した隕石群に突入したのだったら、おまえはひとつ
ひとつの衝突音を聞き分けられたはずはない」

リッキイはうなずいた。

「そのとおりだわ」

「そもそも被害だってこんなものではすまないだろう。さ
きほどわたしにぶつかりそうになった微小隕石はおそらく
直径が幾センチもなかったはずだ。それでもその衝突の衝
撃は蜘蛛を半分以上溶解してしまった。一方あの隕石群は
たぶん、数十センチ大の粒子からなっていただろう。それ
は本来なら『ファインガール』をわれわれもろとも粉々に
粉碎してしまったはずだ。何より準光速航行にとってそう
した隕石群は致命的な障害であるのだし、だからこそ『機
械』の防御システムがとつくの昔に探知して衝突を避けて
いるべきなのだ。何光日も手前からレーダーには星雲みた

いにはつきりと見えたはずなのだから」

「……でも『機械』は回避に失敗した」

「なぜなら、それらは実はそうしたものではなかったから……」

エリオットは映像のひとつに注目し、それに見入った。

「……なるほど太陽を背にしているのか。ドッグ・ファイトの原則に忠実だな。しかしそんな小細工では誤摩化されないぞ。……見てごらん」

それは光行差を補正したうえで船尾方向の球状星団の中心付近を拡大したものだ。さらに電磁スペクトルを広範囲にわたって処理して加視光以外を現わす色彩が混沌と入りまじっている。

「この部分だ」

彼がモニター画面を指す位置に、はつきりほかとは違う白い小さな円形があった。

「星団の輝きで噴射プラズマはごまかせてもラムスクープの発光は消せない。……ほら、こいつは赤へとシフトする背景のなかで唯一短い波長で輝いている」

「いったい何？ これは……」

『ファイナガール』の後方にあつてほぼ同じ速度で動いている別のスクープ融合光さ。つまりわたしたちの後を密かにつけている存在があるということだ」

リッキイは信じられない様子だった。

「こんな深宇宙のただなかで……？　いったい何者？」

「われわれを襲った隕石群は自然の現象ではありえない。あれほどの密度で隕石を集めるためには小さな恒星ほどの質量が必要だが、そんなに強力な重力場なら当然より微小な星間物質を引き寄せているはずだ。そうすればそれらの摩擦によって各種のエネルギー反応がひき起こされていなければならぬし『機械』がそれを探知できないはずはない。だからあの隕石群はいきなり『ファインガール』の鼻先にばらまかれたに違いない。……システムに回避行動がとれないほどの近距離で」

「でも……誰が？　それに、どうやって？」

「……十分な比重をもった岩石をミサイルに詰め込んで発射すればいい。そして『ファインガール』と秒速数キロの相対速度に達したときに軌道と交差させる。ナビゲーシヨン・システムが危険を察知して回避しようとする前に破裂して岩を周囲に撒き散らす」

「でも……それはパパの想像でしょ？」

「それならいままでの謎をどう解釈する？　……隕石群の密度が異常に高いのはそれが一点から撒き散らされたばかりだったからだ。さらに船体の被害が最小であったのも隕石群との相対速度が数十万キロでなくて、わずか秒速数キロにすぎなかったためだと考えれば説明がつくだろう？」

コンソールに身をのりだしていたエリオットは急に疲労

を感じたかのように椅子の背にもたれた。

「間違いない……わたしたちは待ち伏せされ、周到に準備された攻撃を受けたんだ。……おそらくは『イルスター』によってね」

*

エリオットは近傍の空間の水素イオン分布を示す立体画像に見入っていた。C-18は直径百二十光年ほどの球体の表面を形成する水素イオンの線状雲——フィラメントのひとつであり、サイラシンⅡタスマニア星系をその一部に含むこの巨大な球状殻は貴重なフィラメントの連鎖——『北方航路』の主要な部分をなしている。

……およそ一万五千年前、この領域に存在した白色巨星のひとつが超新星爆発を起こして大量のニュートリノと恒星の構成元素を周囲の空間に投げ出したのだ。中心には高速で回転するパルサーが残され、爆発にともなう衝撃波は星間物質を掃き集めながら拡大した。星間物質は圧縮され、原子量ごとに各層に分離し、内部からのX線に照射されて、電離した各種イオンの殻を形成する。やがて球状殻は膨張の速度を緩めて細かく千切れ始め、細長く延びた希薄なガスとなってフィラメントを構成するが、それらはラムジェット推進機関の燃料となる水素イオンを豊富に含みクレイ

ドルから各方向へと延びる理想的な自然の航路を提供していた。

コンピューターによるフィラメントC一八の立体画像は次元のひとつが短縮されていて、エリオットの目にはまるで苦悶に身体をねじる長頸竜のように見えた。その竜の左前足の先に天体記号がひとつある。銀河標準番号はGSN—18202a/b。そしてすぐ脇に警告の赤い文字のスペクトル表示がA5||M2V。ふたつの間がハイフンでなく等号で結ばれているのは〈近接連星〉を意味する……。

彼はつぶやいた。

「答えは三体問題にあるというわけか……」

「何してるの？ パパ？」

エリオットは振り向きリッキイが懸念を含んだ視線ですつと自分の後ろ姿を見ていたのを知った。

「……眠っていたんじゃないかったのか？」

「眠っていたわ。……くたくたに疲れてね」

彼らはここ数十時間ほとんど不眠不休で探査機の噴射システムの調整を行っていた。微小隕石が回路の一部を損傷していることがわかったからだ。そしてつい数時間前になつてようやく『エンキドゥ』が飛べるようになったのを確認して、ふたりは気密ロッカーに倒れ込み、折り重なるようにして眠ったのだった。——エリオットはまるで何か

に憑かれたかのように自分と娘の身体を限界までこき使って、探査機を使えるようにすることに全力をつくした。

「寝苦しくて目が覚めたら姿がなかったから……」

「どこへも行けはしないさ」

「パ……パパだって死ぬほど疲れている筈。それが闇のなかで宇宙服を着たままモニターの青白い光を浴びながら何かをつぶやいている。……大丈夫？」

「もちろん大丈夫だ。こんなに気力が充実しているなんて近頃なかったほどだ」

リッキイの陰うつな表情に、彼は苦い微笑を浮かべた。

「お前が眠っているあいだに『エンキドウ』を出した」

彼女は驚いた表情をした。

「探査機を？ 全然気づかなかった」

「ご覧……」

彼はモニターに再生画像を呼び出した。

「……船首方向から映した『ファインガール』だ」

リッキイは画面に顔を寄せ、眉をひそめた。

「……船首レーダー、FEL反射鏡、そしてスクープ・ジエネレーターがやられている。大量の金属が解けて流れ出しているのがわかるだろう？」

エリオットは画面を切替え、リッキイは息をのんだ。

「側面だ。……幅約百メートル、長さ数キロにわたって結晶素材が完全に失われている。電磁フィールドのバランス

が崩れたときに噴出したプラズマで一瞬のうちに気化したんだな。『グレタ』の反対側で本当によかったよ」

裂け目が拡大されるとまるで壊された蟻塚の表面のように無数の作業ユニットたちが蠢いているのが見えた。蜘蛛以外にもエネルギー補給や情報処理などを担当するさまざまな形態、大きさのそれらがいりまじっている。

「傷は船体の長さのほとんど三分の一に達している。深さもかなりありどうやらシャフトを取り囲む磁場制御装置の一部にまで被害が及んでいるらしい。推進力が十分に維持できないのはたぶんそのためだ」

「回復できる?」

「レーザーとレーザー発振装置はそれほどかからずに直ると思う。しかしジェネレーターと融合シャフトの超伝導コイルは簡単には修理できないだろうな。ひよつとしたら『ファイナंगール』の自己再生能力でも手にあまるかも知れない」

「それはもう……こ、航行不能ということ?」

「いや……、ラム・ジェットは使えなくても現在の速度なら銀河磁場から受けるローレンツ力を利用して近接の恒星系に向かうことはできる。ただしそれもイルスターとの戦いをうまく処理した後の話だ。もしもあまり重水素を消費してしまえば今度は恒星系内にとどまるために減速することさえできなくなる。そうなったら永遠に宇宙をさすらう

ことにもなりかねない」

「……た、たとえばどうなっても」

リツキイは無意味に手を開いたり閉じたりしながら父親の傍らに近寄った。

「パパはあきらめたりはしない人でしょ？　いつも言っているじゃない？　生きているかぎりは希望はあるって……」

エリオットは厳しい表情で傍らに立つ彼女を見つめた。

「いまもそう言ったかも知れないな。ヘンリーやマイアが生きてさえいれば……」

彼女は一瞬瞳を見開き、それから困惑したように目を伏せた。

娘が果たして妹とその夫の死をどう思っているのか、エリオットには確信がなかった。成長してから後、彼女たちが一見互いにうまくやっているように振舞っていても、彼はリツキイが心の底では決してマイアを好いてはいないことを薄々感じていた。

……コンソールに向き直った彼の宇宙服の肩に厚い手袋に包まれたリツキイの手が置かれた。彼女が父親の身体に自分から手を触れるのは珍しい。そしてエリオットの心のなかで不意に時間がずれ動き、遙か昔の遠い一日が蘇った。……食堂のテーブルに頼杖をつき、二度と帰らない面影を

追い求めていたあの黄昏のひとつ。背後から小さな掌がちょうどいまのように遠慮がちに、彼の手にのせられた……。

エリオットは追憶を振りはらうように身震いし、そつとその手を押し除けると娘を振り向いた。

「……状況をはつきりさせよう。われわれは約三十億キロの距離をおいてイルスターに先行している。相手の速度はまだ『ファインガール』よりは遅いが、光速度の九十二パーセントに達し、なおも加速している。一方こちらはシールド噴射のためやむなく毎秒毎秒一メートルづつ減速しているから、いまのままなら必ず追いつかれることになる。わたしの計算ではおそらくそれは二ヶ月後だ」

リッキイはしばらくの間沈黙していたが、やがて低い声で尋ねた。

「……攻撃してくる？」

「間違いない。……あれは『肉食』だ。たぶんFEL……自由電子レーザーが使われると思う。集中的に照射されれば炭素結晶材も破壊をまぬがれないし、シャフトの制御システムにまで被害がおよべば『ファインガール』は完全に機能を停止する……」

彼女は身震いした。

「やがて追いつかれ増殖のための餌にされるとわかっているのであれば、逆にこちらから攻撃するしかない」

「攻撃するっていつでも……、武器は？」

「FELの修理はぎりぎり間に合うかどうかだ。しかも撃ち合いになれば強力に武装しているに違いない向こうが圧倒的に有利だ。……だがわたしたちには探査機がある」

「架台の修理を急いだのはそのため？ ……探査機をミサイルにするつもり？」

「マイクロパイルの安全装置を強制解除して、ね。至近距離でうまく爆発させてやれば少なからぬ損害を与えられるはずだ」

「でも……む、むこの対隕石防御システムは？」

エリオットはうなづく。

「それが難題だ。そのままでは探知され遠方から撃ち落とされてしまう。……戦術を工夫しなければ」

リッキイは身をかがめてヘルメットのなかの父親の目を臨いた。

「絶望的な要素ばかり。それなのにパパは気力が充実している。……まるで戦いを楽しんでるみたいね？」

一瞬、エリオットは言葉を失った。

「……楽しんでるわけじゃない。これは気楽なコンピュータゲームじゃない。生命がけの戦いだし、そのうえ相手は何万年もこうした破壊を続けてきてハンターへと特殊化した存在だ。それに対してわれわれには経験も知識も、そして防御のための有効な武器さえない。果たして二人し

てクレイドルへ帰り着くことができるかどうかさえわからない」

「……」

「だが少なくともわれわれのうち一人は生き残れるようにするつもりだ」

リッキイの表情には明らかに脅えがあった。

「いや……そんなのはとても我慢出来ない！」

エリオットは安心させるように微笑んだ。

「最悪の場合でも、ということだよ。……さあ、もう休みなさい。わたしもすぐに行くから」

リッキイはそれきり黙ったまま彼の側を離れた。しかし居住区画への梯子の手前でもう一度だけ振り向いて、彼女はぼつりと言った。

「やっぱりパパは〈敵打ち〉にご執心なのね」

——娘の言うとおりだ。

リッキイの姿が消えてからエリオットは思った。

マイアたちの死を知ったとき彼は生きる目的を喪失したのだった。身体を動かすためだけにさえありつただけの意志を振り絞らなければならず、ともすれば無気力な追憶の倦怠のなかに沈み込みがちな彼をただ生存のための努力だけが動かしていた。

しかしイルスターによる脅威が現実のものとなったとき、

彼は自分のなかに力に似た何かが生まれたのに気づいた。恐らくそれは復讐という新しいしかし空しい目標のためにすぎないことを彼は知っていた。——自分は盲目的にあいつを破壊したいだけなのだ。それが銀河の磁気の流れほどにも悪意を持たない、ただの機械であるのはわかっていながら……。

やがて手痛い反動がくるだろう。無理を重ねれば、それだけのものをちゃんと後で支払わねばならない。だが、やらなければならぬことは数多くあり、そして気力はまだ彼を支えていた。

*

「……おかしい」

エアロックから入ってくるなり、リッキイが言った。

「センサーが……こ、故障しているのかしら」

「どうした？」

「ベータ・プラス反応があるの。……アイソトープなんてないはずの場所で……」

エリオットは眉をしかめた。こういった難しい状況で、このうえ不可解な事件は願い下げにしたいところだった。

「エアロックに入ったら警告マーカーが点灯した。最初は……故障かと思ったけどカウンターまで反応しているみた

いだから……」

「ちゃんとモードを確認してみたかね？」

「ええ、間違いなく陽電子だわ……」

エリオットはコンソールの表示にすばやく目を走らせた。外部センサーに異常はない。X線やガンマ線ではなく、ベータ線……。ということは外部からシールドを透過してきたものではなく何らかの原子核崩壊がメイン・エアロック自体の内部で進行しているということになる。——とうてい考えられないことだ。

彼はそのまま無言でエアロックへと向かった。恐らくリツキイの宇宙服のセンサーの故障のはずだ。しかし内部扉から一步踏み込むと、エリオットのヘルメットの内部で真紅の明りがともった。

完全に当惑しながら彼はエアロックの内部を見渡した。べつに何も変わったものはない。……船外作業のためのスラスタが二台、壁に磁気固定されている。本来ならここに置くべきものではないが、すでにエアロックはその意味を失っている。あとは即席の隕石防御用の外装パネルが……。

エリオットの視線がくぎづけになった。

「……これは？」

「どうしたの……」

緊迫した声でリツキイが尋ねた。

「……」

彼はつぎに言うべき言葉が見つからずに沈黙した。確かに隕石にもう少しで殺されそうになったとき背負っていた二重パネルの一枚に間違いない……。エリオットは身を屈めてその表面を覗き込むようにした。……ヘルメットの光のなかで炭化シリコンのセラミックの表面に水銀の飛沫のようなきらめきがある。よく見るとそれは深さ半ミリほどの凹型の小さな金属光沢をした窪みの連なりだった。

どう考えるべきかわからないまま手首のカウンターに目を移す。——確かに放射能があった。彼は後退りし、エアロックに飛び込んできたリッキイの身体にぶつかかった。

「いったい何？」

エリオットは首をふった。

「……わからない。だが、長くここにいるべきじゃない。取りあえず出よう」

制御コンソールの前でエリオットは娘の横顔を見つめながら考え込んでいた。目に隈のあらわれた彼の青白い顔はここ一週間のあいだに胡麻塩の不精髭でおおわれている。抗老化剤でも防ぎきれないゆつくりと進行する加齢の印だ。そしてリッキイのどこか脅えたような表情にも、絶え間ない緊張からか疲労の色が濃い。——水を大量に湧かす算段を工夫して身体ぐらい拭くようにしないと……。ぼんやり

とエリオットは思った。……イラストーとの戦いのまえにストレスでふたりともまいつてしまうぞ。

「……放射性物質を含んだ隕石だったのかしら」

不意にリッキイがそう言い、エリオットはうなずく。

「そう考えるのが普通だ。しかしそれでは今になって突然放射能が探知された理由が説明できない。……とうてい見落としていたとは考えられないからね。あときは表面には何の異常も見られなかったはずだ」

「……わたしも見た。確かに何もなかった」

「それにあの形状も気になる。何かか衝突した跡というよりは……。まるで強力な酸かなにかで腐蝕したような感じだ」

「……あのパネルは船外に出したほうがいいと思うわ」

エリオットにも異議はなかった。彼らはひとまずそれを船外のプラットフォームに置いたうえでカメラで監視することにした。同時に小さなサンプルを幾つか削り取って容器に密閉する。——ひよつとしたらひどく馬鹿なことをしているのかも知れない。しかし科学的な調査にベストをつくすことは『機械』をレンタルするうえでのクレイドルとの契約条項のひとつだ。

幸い実験設備の一部は稼動した。彼は娘にサンプルのひとつを分析装置にセットするように命じた。その装置はフルオートで試料を加熱し、表面から遊離した原子に波長を

正確に調整したレーザーを照射してその固有のエネルギー準位にあるイオンの個数を記録する。そこに含まれるあらゆる原子の種類と状態が詳しく計量されるはずだった。

一時間後、リッキイが上がって来て見ると父親はコンソールのモニターのひとつを見つめているところだった。画面にはプラットフォームのパネルの映像が写しだされている。その後ろ姿がどこかしら緊張しているように感じられた。

「最初の分析結果……何かあった？」

真空中で用いられる金属フィルムのプリントアウトを手渡ししながら彼女は尋ねた。

「……いや、別に」

エリオットはそれを受け取り、ちよつと目から遠ざけた。

『『アルミニウム』？』

「それとマグネシウム、ナトリウム。少量の硼素……ベリリウム」

「まるで周期律表じゃないか。一列に並んで——ひどく不自然だな」

彼は眉をしかめた。

「あの衝突の瞬間には陽子と中性子のジェットが発生したはず。若干のアイソトープが検出されてもおかしくないけど……」

「……だが原子量は逆に減っているんだ。それにシリコン二八と炭素十一が含まれているぞ」

リックイは落ち着かない笑いを浮かべた。

「なんだかまるでパネルの素材が突然ベータ崩壊を始めたみたい……」

エリオットは不意に立ち上がった。

「推力停止！——船外作業の準備！」

「い……いったい何？」

「悪いが説明している暇はない」

彼は備品室へと駆け込み、その間にわけがわからないまま推力を止めたリックイはつぎに父親が姿を現わした時その小脇に抱えられた筒状のものを見てひどく驚いた。

「それ、分析装置のレーザー発振器……いったいどうするの？！」

『『消毒』だよ……』

エリオットはそのままあわただしくスラスタを背負い、船外へ飛び出していった。

数十分後、エリオットはぐったりとした様子で『グレタ』に戻ってきた。リックイは少しとげのある言葉で出迎えた。「身体がまともじゃないんだから無茶はやめて。……何をしたの？」

「……外装の炭素結晶を焼ききってきた。あの隕石衝突の

ジェットが飛んだ数十平方メートルの範囲に数箇所、金属状の腐蝕が見られた。恐らくベリリウムだろう……。ついでにプラットホームの一部も切断して放棄しなければならなかった」

「でもなぜ？ どうしてそんなことをしなければならなの？」

エリオットはコンソールに漂い寄り、二分割されたモニターにそれぞれ静止画像を呼び出した。

「見てご覧……。左が昨日のもの。右は二十五時間後——つまり現在のパネル表面だ」

リッキイは息をのんだ。

「これ……増殖してるー！」

「おまえの言ったように確かに安定した同位元素が、しかも連鎖反的にベータ崩壊を起こしているのだ。——この目で見たのでなければ到底信じられないことだがね」

*

エリオットは船載コンピュータのデータベースを検索していた。そこにはシーカーたちによってもたらされる新発見を含めて、クレイドルを出る時点で最新の情報が収められている。しかし今、彼が読んでいるものは地球時代からずっと引き継がれてきた科学ライブラリのひとつだった。

「……そう考えるほかないか」

モニターを眺めていたリッキイが振りかえった。画面には、万一の安全のために船尾に移され、今度は磁場で通常物質と遮断された例のパネルが映っている。

「何が？」

「ストレンジ物質だよ」

リッキイは眉をしかめた。

『『奇妙な物質』？ ……確かにそのとおりだとは思っただけだ』』

「そういう意味じゃない。ストレンジレット——つまりストレンジ・クォークを含んだ物質のことだ」

「何を言っているかわからない……説明してくれる？」

エリオットは画面に映しだされた、かつてパネルだったものの変わり果てた姿を見た。それは金属光沢をもったスポンジ状に膨張し、炭素にまで反応が進んだ黒い部分がある。ちらちらに斑点を作っている。

「ハドロン——核子がクォークから出来ていることは知っているね。陽子はふたつのアップ・クォークとひとつのダウン・クォーク、中性子はひとつのアップ・クォークとふたつのダウン・クォークから構成されている。クォークは強い力を媒介するグルーオンによって堅くハドロンのなかに閉じ込められているから単独で観測されることは決していない」

「知ってるわ」

「アップ、ダウンのほかにもクォークは四種類知られている。つまりチャーム、ストレンジ、トップ、ボトムだ。しかし、これらは超高温超高密度の条件でだけハドロンを構成できるので、通常の宇宙空間にある物質を作り上げているのはアップ、ダウン二種類のクォークだけとされる。：だが、そうではないかも知れないんだ。科学者はアップとダウンのほかにストレンジ・クォークを含んだ物質の状態がありうると考えている。それがつまり『ストレンジレット』なんだ。」

通常、ハドロンだけで構成された物質はごく小さい。最大の原子核でもせいぜい十のマイナス十二乗センチ程度の大きさでしかない。ところが一方でそれらが巨大な質量を作り上げている例もある。——中性子星がそれだ。それは重力によって押し固められた直径十数キロにも達する核子のかたまりだ。

自然界にはその両極端の形態だけがあって、それらの間の大きさの核子物質は存在していないように見える。ストレンジレットはそのスケールの空白を埋めるものだ。アップ、ダウンのほかにストレンジ・クォークを含むハドロンは原子核よりずっと大きなものになりうると想像される。ビッグバンの直後のような超高温超高压の条件下では数十センチの大きさにもなれるかも知れない」

「……じゃあ、あの隕石はストレンジレットだったと言うの？」

エリオットは慎重にうなずいた。

「ストレンジ物質はいわゆる暗黒物質——ダークマターの候補のひとつだ。この宇宙は光学的に観測される物質の量の何倍もの見えない質量で満たされていることは知っているね。そうした『ダークマター』の正体は科学者たちによって様々に説明されてきた。例えばそれはニュートリノだったりブラックホールだったり超対称性粒子だったりする。ストレンジレットもまたそうしたもののうちのひとつだ。もしもストレンジレットがダークマターであるなら、偶然わたしたちが遭遇する可能性は十分ある」

「……」

「あるいはそうではなく、あの衝突のエネルギーでストレンジレットが新たに生み出されたのかも知れない。物理学者たちが想定しているプロセスからすればかなりエネルギーレベルが低い気もするが……。しかしストレンジレット生成の仕組みはまだ全然知られてはいないのだし、重金属を含む大質量が準光速で衝突したわけだからね……」

「……でもなぜあれは増殖しているの？」

エリオットはためらった。

「うむ……それが難題なんだ。中性子星のような超重力下ではストレンジレットは中性子をつぎつぎに捕獲して巨大

化し、最終的にそれを単一の『ストレンジスター』に変えてしまう。だが宇宙空間のような低圧低温の条件下でそうした連鎖反応を起こすとは考えられていない。核力の及ぶ範囲外では逆にストレンジレット自身の電荷が原子核との結合をさまざまげる方向に働くからだ。

しかしいっぽうであきらかにあのパネルのアルミニウムや炭素の同位体は周囲の炭化珪素からハドロロンが奪われることによって産みだされたと思われる。そしてさらにアルミニウムからマグネシウム、炭素から硼素へとその反応は進んでいるようだ。つまり……これはあくまでひとつの仮説にすぎないんだが、ストレンジ物質の相がエキゾチック粒子をともなつて複雑な——いわば『核子化学』的な連鎖増殖反応を引き出すのかも知れない。ちょうど地球の置かれた物理的環境が酵素という複雑な化合物の存在を許すことで多彩で豊かな分子化学反応をひきおこしているように……」

「つまり生命?」

エリオットは苦笑した。

「さすがにそこまで断言したくはない。しかし核力で代謝する生命体が存在しないとは言い切れないのだし、ひよつとしたら宇宙空間はこうしたストレンジレット生命で溢れているのかも知れないじゃないか?」

リッキイは黙ったままゆっくりと首をふった。

*

エリオットはコンソールのモニターを見つめている娘の隣の席に無言で座ると画面を覗き込んだ。中央に光の点がある。背景の球状星団の明るさにも紛れようのないまばゆい輝き——イルスターのスクープ状磁場に螺旋状に巻き込まれる水素イオンのサイクロトロン放射、そしてラム吸入圧縮による部分的な核融合光だ。通常は真珠色と形容される穏やかな光であるはずのそれらは、進路後方の赤外域への波長シフトをコンピュータ修正した映像のなかでは凄まじいまでに青白い光芒を放っている。まさに夜空に他を圧して輝く〈不吉な星〉だった。父と娘は息をつめてその怪しい姿を見まもっていた。

「……距離、三千五百万キロ」

リッキイは画面下の表示にちらりと目をやる。

「相対速度二百五十キロ毎秒。ゼロ・ポイントまで一万三千八百秒」

彼女はカメラを望遠に切替えた。ラムスクープの強力な磁力線で編まれた繊細な光のレースが高倍率で拡大された小さな円盤となって見える。しかしその背後に潜む狂った機械の黒い影はこの距離からではまだ見ることはできない。

数日前になって対隕石防衛システムが回復し、『ファインガール』を自由落下状態にしてようやくひと安心したエリオットは、初めてリツキイに彼の作戦について具体的に説明した。

「攻撃については、どうやら有効な機会は一度しかない。……前にも言った通り相手の防衛システムをかくぐって探査機をごく近くまで接近させなければならぬが、そのためには敵の注意を引きつけてしかも探査機の存在をカムフラージュできるような何かが必要だ。そしてそれに使えそうな手段はわれわれにはたいしてない——率直に言えばたったひとつだけ。噴射プラズマだ」

「噴射プラズマ?」

「プラズマに隠して探査機を突入させる。電磁遮断効果で相手のドップラーレーダーをごまかすことができるはずだ」

「……で、でもそんな近距離ではFELでこちらがやられてしまう」

「自由電子レーザーの有効射程距離はそれほど長くはない。……レーザーによって結晶素材が気化するには数秒かかるし、その間ビームを一点に集中していなければならない。遠距離ではそれは非常に精密な照準の制御を必要とする。噴射によって絶え間なく振動している『機械』の間ではなおさらだ。……有効射程はせいぜい数万キロといったこ

ろだろう」

「でも相手の『ファイインガール』よりずっとパワーアップされてる。照準が定まらなくても一触しただけでかなりのエネルギーを浴びせられる」

エリオットはうなづく。

「そのとおり……安全を第一に考えるなら相手を百万キロ以内に近寄らせるべきではないだろうな。だが一方でプラズマの密度と振動数があまり低くならないうちに探査機を送り込まなくてはならないんだ。噴射されたプラズマの温度は数分以内に数千度まで下がってしまう。防御システムのレーダー電波を遮断しておける時間はだからせいぜい五六分間——秒速一万キロのプラズマ・ジェットにとっては三百五十万キロ前後の距離になる。だからそのタイミングで敵に遭遇するように探査機をスタートさせ、直後にエンジンの噴射を開始しなければならない」

「……難しいわ」

「ああ。相手が遠すぎれば反撃の唯一の機会が失われるし、近すぎれば致命的な一撃を被ることになるだろう。しかしやるほかはない。ゼロ・ポイントは距離三千二百万キロから三千百万キロのあいだのどこかだ……」

それから十数時間。彼らの運命を決するその『ゼロ・ポイント』はすでに間近に迫っていた。

「距離、三千二百五十万キロ」

「速度は？」

「変わりません」

「獲物を捕えたと確信しているのか、あるいは限界速度に達しているのか……」

光速度の九十五パーセントではラムジェットが吸入し噴射する陽子は静止質量の三倍の重さがある。それはローレンツ変換式にしたがって光速に近づくにつれ指数的に増加する。一方で星間水素イオンの時間あたりの吸入量は速度に比例するだけであり推進力には当然上限がある。

「相手の噴射プラズマのスペクトルからトリチウム、ヘリウム3、陽子の存在を確認した。ようするに推進システムは『ファイナール』と基本的に同じということだ。エネルギー変換効率とラムスクープ圧縮抵抗から考えて、最高の効率でも速度はすでに限界に近いはずだ……」

彼はすばやくリスト端末で計算した……相手が現在の速度を保っていてくれるという保証はまったくくない。しかしそれを承知で決断すべき時だった。エリオットは深く息を吸い、娘にうなずいた。

「……ハンガー扉開口。探査機作動！」

リッキイはコンソールのキーのひとつに触れた。モニターのひとつのなかでチタンと炭化シリコンの傾斜機能素材が作る銀白色の機体——『エンキドゥ』が静かに格納スぺ

ースを滑りでていく。それに鋭いまなざしを送るエリオットの口元には高まる感情を押さえこもうとする緊張があった。……小さいながらも高性能なエンジンを備え、幾度となく彼らの目や手として働いてくれた信頼出来るロボット探査機。マイアはそれに「ギルガメツシュ叙事詩」に登場する英雄の名を与えた。……イルスター (III-Star) —— 狂えるイシユタル女神 (III-Istar) を相手とする娘の弔い合戦になんとふさわしい、これは幕開きであることか……。

見つめる画面に隣り合ったモニター群がふいに生き返り、探査機の搭載カメラから送られてくる画像が映しだされた。星虹の淡い光に照らされる『グレタ』の細い三日月が次第に遠ざかり、やがて暗闇に浮かぶ巨大なシリンダーのつくる直線の小さな一部となっていく。……幸運が果たして彼等に微笑むかどうかは十二時間以内にわかるだろう。

「三千二百万キロを切りました」

リッキイが感情を押えた口調でそう言い、ふたたびキーのひとつに触れた。

「噴射千八百秒前。——『機械』から作業ユニットたちに加速警報が出されます。ハンガー扉閉鎖。架台フレーム・ロック・オフ！」

『グレタ』の船体が揺れた。加速度に対してクルーザーを支える枠組みが電磁的なショック・アブソーバーをともなつて自由に回転する状態へ移行したのだ。不足する資材

をかき集めてどうにか応急に修理したフレーム。それが鈍い振動とともに軋むたびにふたりははらはらした。

「距離三千百六十万キロ。噴射二百秒前」

「速度は？」

「……同じです」

エリオットは暗い微笑を浮かべた。

「よし！ どうぞやらあの『女』に痛い目を見せてやれそうだな」

「噴射百秒前。秒読み開始」

リッキイの手が指令キーに延ばされエリオットは密かに歯をくいしばった。

——マシンよ！——

「……五十、四十九、四十八、四十七……」

無意識のうちにふたりは衝撃に備えて座席のうえで身体をかたくしていた。

「……五、四、三、二、一、——噴射。推力ゼロコンマ一

G」

音は聞こえないものの『機械』の奥深くから次第に大きくなってくる重々しい振動が床から宇宙服を通じて身体に伝わってきた。船体の全長を貫く長大な融合シャフトのなかに作られたタンデム・ミラー磁場配位のなかで巨獣的スケールの重水素＋重水素熱核反応が始まったのだ。毎分半トンのアイソトープが消費される融合反応のひとつごとに

トリチウムと陽子と四メガ・エレクトロン・ボルトのエネルギーが放出され、それらはそのまま船体に対して秒速一万キロの速度を持つ超高温プラズマ流を形成しつつ尾部に開いた巨大なノズルから噴射される。

『グレタ』の球形の船体が『ファインガール』に対し次第に傾き始め、やがて身体に十分の一Gの重みが加わるころ、船尾方向に操縦区画の床を向けて安定した。船尾方向のテレビモニターの中には猛烈なプラズマの炎がゆらめいていた。『ファインガール』の背後に数万キロの長さにわたって白熱する光の航跡が生みだされているのだ。エリオットは『エンキドゥ』からの送信画像を見上げたが荒れ狂うプラズマのために画面は乱れ、すでに判読不可能となっていた。探査機との通信は途切れ、もはや二度と回復することはない。いまとなつてはそれがプログラムどおりに使命を達成してくれるのを祈ることしかできなかつた。

『エンキドゥ』は姿勢制御用のイオン噴射でプラズマから一定の距離を保って自由落下状態で漂いながらイルスターの接近を待つことになる」

運命を決する作業を終えたあとの一種の虚脱感ともに、その日の最初の食事である非常用ペーストを口のなかに絞り出しながらエリオットは言った。

「……プラズマのドリフト電流がスクープファイールドの安

定を損なうのをきらって相手が進路を修正したら?」

「たとえそうでもこちらが加速に入った以上は大回りをし
て必要以上に運動量の浪費はしまい。フィールドの半径以
上に離れることはないはずだ。それなら『エンキドウ』の
最大加速でわずか三分の距離だ」

「でも電子回路にとって三分は長い時間……接近を悟られ
るかも」

エリオットは確信をこめて首をふった。

「プラズマを背景にして近づくことになるから探査機の融
合光は見えない。センチメートル以下のレーダー波は攪乱
されてしまつて探知は不可能だ。メートル波を使えば『エ
ンキドウ』を捉えることはできるだろうが、わざわざそん
な長波長帯にセットしているとは思えない。……そもそも
肉食獣が獲物に寄生したシラミに興味を示さないと同じ
に彼女は人間であるわれわれの存在など気づいてもいない
さ。反撃を予想しているわけがない」

『エンキドウ』の奇襲が完全に相手の意表をつくもので
あることについてエリオットは何の疑いも抱いていなかっ
た。しかしそれとは別の懸念を彼は娘のまえでは口にしな
かった。探査機はミサイルとして作られたものではなくそ
の核爆発は完全にコントロールできるわけではない。安全
装置の強制解除のための暗号コード——それはクレイドル
委員会の綿密な調査と許可を得て初めて手に出来る——を

『エンキドゥ』の搭載コンピュータに入力しつつも、エリオットはその最終的な爆発にいたるプロセスが数秒の誤差を必然的に含んでいることを十分承知していた。計算どおりならその爆発は電磁フィールドのバランスを崩し融合プラズマの漏出によってジェネレーターを破壊して相手を立ち往生させることができる。だがもし少しでもタイムミンクが狂えば相手は無傷のまま『ファイナール』に追いつくことになる。

「まあ確かに〈兎の足〉ぐらいは欲しいところだがね」

エリオットはそう呟き、リッキイは妙な目で彼を見た。

「……おまえには無意味な言い回しだったな。地球時代の〈幸運のお守り〉だよ」

「わたしにとって地球の話はパパとママの間の秘め事だった」

突き放すような娘の言い方にエリオットは話の接ぎ穂を見失い、しばらくふたりの間に気まずい時間がながれた。やがて彼は話題をかえるべく尋ねた。

「……ところで、ちゃんと薬を飲んでいるだろうね？」

リッキイは手に持った向精神薬剤のカプセルを見せた。

「この騒ぎでうっかり忘れているのじゃないかと思ってね」「忘れたりほしないわ」

ふたりはそれっきり沈黙し会話も味気もともない食事を続けた。

*

「……噴射は止まっている」その華々しい閃光ははつきりと見えた。彼は望遠カメラの映像と分光装置につきつ切りでその一撃の効果を探った。

「融合光の異常なゆらぎも確認した。やつのジェネレーターに何らかの被害を与えたことには間違いないな……」

「でもまだ光は見える」

画面の中央の青白い輝きは一層強くなっているようにさえ感じられる。

「多分、爆発のタイミングが千分の一秒ほど遅れたんだ。残念ながらジェネレーターを完全に破壊するには至らなかったのだろう。しかしそれでも電磁場の安定が失われた瞬間に漏れ出たプラズマが船体——恐らくは動力シャフトの一部も破壊したに違いない。さもなければ噴射を止めるわけがないからな。……接近速度は毎秒二百キロまで下がっている」

彼はコンピューターに数秒のあいだ数値を入力した。

「……与えた被害の程度にもよるが、もしこのままむこうがエンジンを使えないようなら最接近距離三十万キロでどうにか逃げ切れそうだ」

「……きわどい距離」

エリオットはうなずく。月と地球の間ほど……。出力としてならFELが十分有効だ。

「最接近の時点で船体に回転を与えよう。……姿勢を制御することはできなくなるがレーザー照射の威力は半減する。三十万キロの距離ならたぶん持ちこたえるだろう」

もつとも……。彼は心のなかで思った。……相手の推進機関の回復が早ければもつと近い距離から狙い撃ちにされるし、それを防ぐ手段はもはやないのだ。生き残れるかどうかは『エンキドウ』の一撃がどこまで敵にダメージを与えられたかにかかっている。

「たまらないわ。さ、最接近をじつと待っているだけなんです……」

エリオットは宇宙服の上から娘の腕に触れた。

「安心なさい。きつと……」

ヘルメットの内側で低い警告音が鳴り出し、ふたりは一瞬顔を見合わせた。

「コンピュータの警報！」

「何か探知したらしいな」

リッキイはモニターに飛びついた。

「せ、船尾方向に新しい噴射光を確認！ ……数は三つ！」

「……ミサイルだ。FELの有効距離に追いつけそうもないので苦し紛れに撃つてきたんだ。予想していたことだよ」
エリオットは娘を落ち着つかせるようつとめて穏やかな

声で言った。

「どうするの?..!」

「船首を少しだけ各ミサイルの飛来すると反対の角度へ回頭しなさい。……ラム・ジェット船を後方から撃ち落とすことなどではしない。これはあいつの悪あがきだ」

彼らはモニターを見つめ続けた。やがて光のひとつが瞬くと消え去り、残りの二つもしばらくすると画面の外へと逸れていった。

『ファイナガール』の噴射するプラズマの尾は場所によつては数万度。どんな物質もそこに数秒以上とどまることはできない。そしてわずか十分の一度の船体の傾きでもそれは進路の周囲に幅数千キロのバリアーを作り上げる。追尾するミサイルたちはプラズマに突っ込んで自滅しないためには大きく進路を反らさなければならぬが、そうすれば今度は加速が不十分となり標的には永久に追いつけない。「これで相手もミサイルは使えないことがわかったはずだ」

エリオットはそれでも内心ほつとしながら微笑んだ。

「……だけどプラズマ遮蔽効果で今は後方レーダーは使えない。相手が爆弾を慣性投射してきたらまったく探知できないわ」

リッキイの不安にエリオットは首をふった。

「……その心配はいらない。十分の一Gの出力とはいえそれでも毎秒毎秒一メートルの加速度だ。三十万キロの距離

で核弾頭を『ファイニングール』に届く初速で打ち出せるような長大なマス・ドライバーはさすがの『機械』にも搭載できないよ」

「でもイルスターは思いもよらない武器を持つてるかも知れない。……わたしたちの考えていることも見抜かれてるかも……」

エリオットは相手の表情を窺った。……ここ数日リッキイの不安傾向が次第に目立つようになってきた気がする。度重なるストレスで彼女の精神の安定性が崩れかかっているという可能性もあった。

彼は意識して微笑しながら言った。

「おまえは相手をかいかぶり過ぎているよ。あれは狂ったプログラムでやみくもに動くだけの知性など何一つないただの『機械』さ」

リッキイは首を傾げたもののそれ以上何も言わなかった。

*

光行差によってほとんどの星が船首方向へと集中した船尾の暗闇に明るい輝きがある。すでに肉眼でもはつきり円盤として見える距離にイルスターは迫っていた。ただしクルーザーのすべての窓にはレーザーを照射されたときのために鏡面シャッターが降りていて実際にはそれを眺めるこ

とはできない。

「……二十一万キロ」

大儀そうにリツキイが言う。前方への加速度に船体の回転による遠心力を加えた一・五Gがふたりの身体にかかっている。重い生命維持装置を背負ってでは身動きすることきさえ困難だった。

「記録装置、すべてオン」

「この距離からイルスターを見る人間は、おそらくわれわれが最初だ」

エリオットは身体をずらすようにして画面に顔をよせた。

「……基本的にはイシユタル機械だな。……だが幾つか見慣れない突起がある。あの側面の円筒はたぶん自由電子レーザーのヘリカルコイルだ。そして隣にあるのはマス・ドライバーの射出口だろう。ミサイルの発射にはあれを使つたはずだ」

リツキイは奇妙なほど無表情だった。

「……不気味な姿」

エリオットはモニターの数値を見た。

「……センサーが過去数分間に幾度か急激な温度の上昇を記録している。……一部で千度Kを超えた瞬間もある……」

「……」

「攻撃？」

「ああ、FELの照射だ。だがビームが見えないのであま

り脅威を感じない……」

彼がそう言ったとたん船体がわずかに揺れた。

「何……?」

リッキイは脅えたように言い、エリオットは苦勞してテレビカメラの画面を振り仰いだ。

「船尾のヘリウム回収装置の一部が吹き飛んでいくのが見える。……油断できないな。大した威力だ」

それから彼は顔をしかめた。

「恐らくあのストレンジレットのパネルも吹き飛ばされたな……」

「光が！ ミ、ミサイルを撃ったわ！」

突然、彼女が叫んだ。

「……落ち着きなさい。この距離ではFELではどうにもならないことがわかったんだ」

「今度はプラスマジヤ対処できない。モ、モーメントが邪魔をして姿勢を変えられないもの！」

「冷静に！ 大丈夫だ。エンジンを数秒の間止めて隕石迎撃システムにミサイルの軌道を計算させる時間を与えなさい」

「でも停止には十分以上かかる！」

「充分間に合う。……二十万キロの距離があるんだ」

それでもリッキイは震える指でキー操作をした。彼はそれを懸念を含んだ目で見ていた。

「あわてることはない。たとえ十G加速でも着弾まで四十分以上ある」

システムが働くのは一瞬だった。船首のレーザー射出口からの目に見えないビームはサーボ機構で制御される二枚の鏡に反射されて後方へと送られ飛来するミサイルの弾頭をつぎつぎに破壊した。

「……FELもミサイルも駄目。これであいつは手詰まりだな」

彼は再開された噴射による船尾の安定した炎を眺めながら続けた。

「しかもこれからは次第に距離は離れていく……」

しかしリッキイの顔色は良くなかった。

「……でも、いつまでも鬼ごっこを続けられない。間違いなくこちらの被害は深刻で、相手は軽傷……。や、やがて向こうの修復が終われば一G加速ですぐに追いつかれてしまう」

エリオットは彼女の不安をなだめるように大きくうなずいた。

「最初からそれはわかっていたさ。……『エンキドゥ』の攻撃はひとつのギャンプルだった。そしてわたしたちはいまのところそれに勝ったようだ。仮にこちらの攻撃が大した痛手を与えるものでなかったにせよ時間を稼ぐための意味はあったのだからね」

エリオットはコンソールのキーに触れ、自分で作成した戦略図面を呼び出した。

「時間を稼ぐ？」

「ここへ到達するためにだ」

彼はモニターのうえの図表の一部を彼女に指し示した。そこには『ファイナंगール』の軌道と思われる長くゆるやかな曲線の端に、小さな円周とその上のふたつの点が描かれていた。

「GSN—18202。連星系だ。……すでにずっと前から磁場航法で徐々に進路をそちらへと向けている。相手にわずかでも先行してあそこに到達できれば重力カタパルトの要領で逃げるができる」

『重力カタパルト』？」

「——近接した連星の回転を利用して重力作用だけで宇宙船を加速するダイソンの方法だよ。そのときの加速度は連星の周転速度の二倍になる」

「……よくわからないわ。だって、そ、それではせいぜい光速度の百分の一程度の効果でしかない。……違う？」

「そのとおりだ。しかしお前は速度がベクトルであることを忘れてる。連星の重力カタパルトはわれわれに軌道と直角方向の加速度を与えてくれる。そして力の働く方向は相互のわずかな位置の違いによって大きく変わってしまう。つまり古典的な三体問題だ。あれだけ高速で回転する連星

系に突入するときにはその後の軌道要素を予想することはほとんど不可能なのだ。わずかな時間と角度の違いが大変な差になるからね。彼女がわれわれの後を追おうとしても連星通過後の『ファインガール』の軌道はあらかじめ十分正確には計算することはできず、また通過の後では加速が大きすぎてもはや修正することもできない……どうだ。少しは安心しただろうか？」

エリオットは微笑し、モニターを確認して言った。

「もう相手もFELの使用を諦めたようだ。……回転を止めてもう少し過ごしやすくしたらどうだ？」

リックイはわれにかえったように、しかし妙にぎくしやくとした動作でキーを操作した。

*

満場の評議委員たちが見守るなかでエリオットは娘の肩を抱きながら議壇に立っていた。

「……それで、彼女の名前は？」

背後から声が尋ねる。

「まだ決めてはおりません」

彼は答え、周囲の人々の顔を見わたした。懐かしい顔もあり、またエリオットの知らない顔もある。そしてなぜか最前列の人々のなかにフレドリカが座っていた。時折、見

せる不思議な微笑を浮かべて……。その表情からはいつものとおり彼女が何を考え感じているのか読み取ることにはできない。

「十二歳になれば凍結を解かれクレイドル市民としての権利と義務が与えられる。君は自分の子供を名づけなければならぬのだ」

議長が言う。

「そしてそれは正式に記録され関係機関に通達される」
「今、ここで？」

全員が儀式の身振りのように重々しくうなずいた。

「異存はありません。それが委員会の意向なら……」

エリオットはかねて用意してきた名を言おうとする。しかし思い出せない。彼はあわてて上着を探りメモを捜す。

「どうしたのかね？」

「……もう少し、お待ちください」

しかし娘の名を書きつけてきたはずの紙片はどこにも見つからなかった。

「グローヴナーくん、クレイドル評議委員会は多忙だ。君にはあまり時間が与えられていない。いますぐ娘の名前を決めてもらう必要がある」

エリオットは迷った。用意してきた名は思いだせそうもない。他に……。彼女にふさわしい名前は確かにある。だが……。

「さあ……」議長が問う。

「……娘の名は」彼が言う。

「……名前は……？」議員たちが唱う。

彼は息を吸い、そして彼にとって唯一のものであるその名を口にした。

「『グレタ』」

突然、彼の腕の下で若々しい身体がはかなく崩れ落ちた。

……驚愕し、戦慄つつ、エリオットは議壇の床に仰臥する娘を見る。黒く長い髪が乱れまといつくその横顔は蒼白、その瞳は空ろだ。

ゆつくりとリッキイが演壇に上がり、妹の横にひざまづいた。

「……死んだわ」

幾度か唾を飲み込んだすえに、ようやく呟くようにエリオットは問うた。

「……おまえはなぜここにいるの？」

彼女は父親の顔を見上げ、そして言った。

「あなたを裁くためよ……。パパ」

エリオットは目覚めた。

額に触れるとびっしょりと汗をかいている。口のなかが粘つき身体を動かすと節々が痛む。……微熱があるのだから。悪夢だった。娘が死んだ夢だ……。彼はその手で顔を覆

い、それから本当にマイアがもう生きてはいないことを思
い出した。

身を起こし一瞬脅えたように周囲を見回すとエリオット
はやがて背後の金属の壁にぐったりと上体をあずけた。――
自分自身がまだマイアたちの死を受けとめきれないとい
うことか？　こうして目覚めのたびに娘を失う痛みを新た
に体験するのではたまらない……。エリオットは目頭を拭
い、そして狭い気密ロッカーのなかを見渡してリツキイが
いないことを知った。疲労の感覚を押し殺すようにして立
ち上がり、ガラス越しに暗い居住区画を眺める。そこにも
彼女の姿はない。

彼は宇宙服を身につけヘルメットを被るとドアのバルブ
を開いた。透明シートの簡易エアロックが広がってぴんと
張り詰める。フェイスプレートを下ろし扉の外にでるとシ
ートの空気を抜いて気密ファスナーを開ける。

ヘルメットのライトをつけると四つの冬眠ポッドが長い
影をひいた。彼は引き寄せられるようにマイアのポッドに
近づき、顔を寄せて覗き込んだ。……。そうしているうちに
徐々にふたりの女性の笑顔が、それぞれの暖かい思い出と
ともに脳裏に蘇える。エリオットはじつと佇んだまま、そ
の記憶とともに永久に心を凍結することができたらと考え
た。

「……『マイア』はパパの好きな小説の主人公の名ね」

声が聞こえて我にかえった。ずいぶん長い間そうしていたらしい。エリオットは振り向き、リツキイのヘルメットのはなつ照明にまぶしげに目を細めた。

「でも、わ……わたしはただの『フレドリカ』」

機械がきしるような不自然な声だった。

「……どこにいたんだ？」

リツキイは無表情な顔で言った。

「サンプルを見ていた……」

「何か変化が？」

彼女は首をふった。

「不安だったから」

「イルスターとの最接近を無事切り抜けたばかりだということに、また心配かね。あれは人間が初めて手に入れたストレンジクオーク物質だ。ひよつとしたら元素転換の秘密をわれわれにもたらすことができるかも知れない。簡単に宇宙空間に捨てるわけにもいくまい？」

「——それでマイアも……そ……そのままにしているの？」

唐突な質問にエリオットはたじろいだ。

「……なんのことだ」

「パパはマイアを手ばなせないんだ、わ。……し……死体になっても」

「……なにを馬鹿なことを。準光速で宇宙空間に遺棄して

ふたりの身体をずたずたにしたくはないだけだ。すぐ後ろについているあいつの融合プラズマに捕えられてしまう恐れもある」

「そうなの？ わ、わ、わたしはパパがクローニング再生のためにクレイドルに持ちかえるつもりでいるのかと思っただわ。むかし……マ、ママにそうしたように」

夢の記憶が一瞬ひらめき、彼は答えようとしてあえいだ。

「そんなことは……」

リッキイはどこか歪んだ微笑を見せた。

「いいのよ、そ、それでも……。ふたりで新しい『グレタ』を育てましょうよ。クレイドルは……。ご……五年間のバザルリ半島での育児休暇をくれるわ……」

「やめないか」

エリオットは苛立たしげに手をふった。

「お前は自分の家庭を持つべきだ——」

「……新しい惑星が……は……発見されて？ わたしのせ……遺伝的素質が問題にならないような新世界が、い、いまこの瞬間にも見つかっているかも知れないって言うの？

……そ、そうね。その可能性はたしかにゼロじゃないだ、だけど……」

リッキイは反論しようとする父親を遮って言った。

「わ、わ、わたしがその星系へ移住するころには、と、とつくに人生の盛りは過ぎてお、老いさらばえているのだわ」

「そんなことはない。お前はすべてを悪いほうへ考えようとしたただけだ……それにわたしにはいつもお前が自分の遺伝的な弱点を言い分けにしているように感じられてならないんだ。いつまでも母親になりたくない、というのが実はおまえの本音ではないのか？」

彼女は険しい表情で首をふり、父の言葉を否定した。

「——ち、違うわ。パパは、い、何時でも……そんなことを言っ……わ……わ……わたしに、ひ、卑劣な畏をかけるようにするのね……」

エリオットは大きく息をすった。明らかにリッキイは発病の一步手前だ……。

「おお……リッキイ。なぜお前は……？」

彼女の目に獣のような狂おしい光が現われたのを見て、彼はこれ以上娘を追い詰めることの危険を感じた。

「……安心なさい。いずれにせよ、わたしはもうマイアを再生するつもりはない」

「な、なぜ……？」

言葉を唇の間から絞りだすようにしてリッキイは尋ねた。「なぜ、こ、今度もそうしないの？」

エリオットはためらい。娘の視線から目をそむけてマイアの『棺』を見下ろした。

「……死んだ母親を娘として生き返らせた決断を正しかつたと確信しているわけではないよ。いま思えばどうやらそ

れはお前の心をひどく傷つける結果になってしまったよう
だ」

リッキイの低い声が答えた。

「……でもパパはそうした」

「グレタは『踊り手』として不世出の身体と直感力とを持
っていたんだ。クレイドル委員会はそれを惜しみ、そして、
わたしも……」

エリオットの脳裏にその遠い夕暮れが蘇った。テーブル
のうえの家族の写真。窓の外の雨上がりの夕焼け。そして
彼の腕に置かれた小さな手……。

「……そのクローンにパパは……マ……マイアと名付けた。
パパの心のなかの理想の女性として……そ……育てあげる
つもりだった」

エリオットは不意に顔を上げた。

「たしかにそうだったかも知れない。だが……そう言うお
前の名だってグレタのお気に入りの小説の登場人物の名前
だったんだよ」

目に見えてリッキイは動揺した。

「……わ、わたしの名が？ う、う、嘘だわ！ マ、ママ
はわたしが自分に似ずに不細工なのを心底嫌っていたのだ
ものっ！」

「なにを馬鹿なことを言う？ ……信じなさい。これは本
当の話だ」

「だ、騙すつもりなんだわ。そして影で嘲笑するんだ。マ、マイアやヘンリーと同じに！」

エリオットは溜め息をついた。怖れていたとおり根拠のない被害妄想が娘の心をとことんむしばんでしまっているようだ。

「なぜ信じようとしらない……わたしたちは父と娘ではないのか？ ……どうやら、もう少しお互いに……」

そのとき、突然の強烈なショックがクルーザーを揺り動かし、彼らを床にたたきつけた。ヘルメットの中でコンピュータからの警報が鳴り響く。

「今になって攻撃？」

エリオットは混乱した。

「——そんなことはあり得ないはずだ！」

彼は立ち上がりうとして脇腹の激痛にうめいた。どうやら今のショックでふたたび痛めたらしい。

「外部展望！」

彼は身体を引きずるようにしてコンソールにたどり着いた。クルーザーには妙な具合に加速度がかかっている。

「船体が回転している……」

——爆発の反動だ。ミサイルか？ だがコンピュータは何も探知していなかった。彼は外部カメラをつぎつぎと切替えながら周囲の空間を探り、やがて呆然としてモニターのひとつに見入った。暗黒のなかの銀白色の円盤が画面

を一瞬横切って消える。星虹をバツクにそれほど幾何学的に完全な凶形が唐突に存在するということ自体、ひどく現実味を欠いた光景だった。円盤は『ファイナガール』の回転にしたがってつきつきに別の画面に現われながらゆつくりと小さくなっていく。……エリオットは歯をくいしばった。

「イルスター！ ……そうか！ この手があつたか……。わたしの油断だ。お前の警告をもつと真面目に考えるべきだった。反動噴射を使わずに弾頭を送り込む方法が確かにもうひとつあつたのだ！」

リッキイを横目で見たエリオットは、思わず呪詛の言葉をつぶやいた。……彼女はその場に凍りついたまま完全に無表情でモニター・スクリーンを見つめている。カタトニ——緊張症状？

ビーブ！

再び警報が鳴り響いた。——噴射光確認！

モニター画面に光点の位置を示す矢印と二組の数値がスーパードライブされる。さらに二機のミサイルが急速に迫りつつあった。

この危機に及んで娘の若く機敏な操船能力にたよれないとは……？ モニターを見つめながらエリオットは絶望的な気持ちになった。

……防衛システムのためにエンジンを止めている時間は

とてもない。回頭して噴射プラズマで防ぐしかないが、爆発によって与えられた回転のために姿勢制御はきかないはずだ。まず『ファイナール』のスピンを止めなければならぬ。恐らくミサイルのひとつを防ぐだけで精一杯、別のひとつが確実に着弾するだろう。

こんな緊急事態で制御ジェットの噴射タイミングは到底計算できるものではない。全長二十キロの巨体のスピンを相殺し、かつすみやかに回頭させるには長い経験によって鍛えられた反射神経を要する。それでもエリオットは最善をつくし、数分の奮闘の後スクリーンに明るい閃光を残してミサイルのひとつは消えた。しかしもうひとつの輝きはプラズマを回避して接近しつづけている。

「……だめか！」

無念の叫びを上げると同時にふたたび猛烈なショックがあった。エリオットは娘の身体をかばうようにして床に伏せたが、船体が軋む音とともにクルーザーに不規則な加速度が加わり、そのままつれあうようにして居住区画の反対側まですべっていった。激しく壁にぶつかり脇腹の苦痛にうめきながら、それでも緩衝材のためにふたりとも大きな怪我はなかった。しかし不気味な振れが納まったあとエリオットは心臓が凍りつきそうになった。あの馴染みぶかい振動がない。……融合エンジンが動いていないのだ！

シャフトがやられた？

もしも電磁場が一挙に崩壊したのだとしたら『ファインガール』の心臓部分である融合シャフトは残留する数千万度のプラズマによって瞬間的に破壊されてしまっただろう。——これでおしまいか！

エリオットは硬直した娘の身体を背後からしっかりと抱えた。だが彼女の完全に空ろな表情を見て彼は気を取り直した。……ここで自分が挫けるわけにはいかない。

半数以上のモニターが死に、ほとんどの表示がレッドへと変わってしまったコンソールを彼は祈るように見つめた。冷静にならなければ……制御噴射はまだ使える。防御システムもたぶん生きている。さらなるミサイル攻撃にそなえて『グレタ』を守らなければならない……融合エンジンを失っても予備システムさえ無事なら最悪でも冬眠しながら救援を待つことはできる！

*

「欲望も目的意識もなく自己複製を命じるプログラムがその行動を支配している。そうした『機械』ではありながら確かにあの『女』は愚かじゃない」

ガラス瓶のなかの水をレーザーで加熱した乏しい湯での洗髪の後、娘の髪を乾かしながらエリオットは自嘲の口ぶりで言った。あれ以来、リッキイは食事や自分の身体の清

潔さについてまったく無頓着になってしまっていた。――空腹や苦痛の感覚はちゃんと感じているにもかかわらず、それらが自分自身とどう関係しているのかが理解できなくなっているのだ。

「むしろ愚かなのは人間であるわたしのほうだ。お前の言う通り見過ごしていたポイントがあった。わたしは反動で推進されるミサイルは噴射光を探知できるし、またレーザーはどんなに高出力でもあの距離からわれわれに照準を絞ることは不可能だから、いずれにしても脅威とはなり得ないといひとりぎめしていた。しかしあいつはそれらを組み合わせることで見事にわたしを出し抜き『ファインガール』を仕とめる手だてをみだした……」。

そう……、レーザー帆だ。ごく薄いセイルをレーザーの光圧で推進する。……大面積だから数百万キロの距離からでもレーザーで照射できるし、帆自体は極めて軽く薄い材質で出来ているからいくら星間物質で穴を開けられてもほとんど影響がない。そして表側を黒く塗っておけば間近に接近してもわれわれからは見えない。『ファインガール』に追いついたところでセイルを切り離してエンジンに点火したわけだ……」

子供のように両足を投げ出し、上半身裸で床に座ったまま虚空を見つめている娘に彼は言い聞かせるように語りかけた。

「シャツをみごとくに破壊されてしまったよ。もはや『機械』の自己再生能力にも期待はできない。いまのところはわれわれのほうがまだ速いから互いの距離は開きつつある。しかしいつまでもそうはいくまい。相手がエンジンの修理に成功したらあつという間に追いつかれるだろう」

エリオットは娘の乾いた長い髪を何とかまとめ上げようと苦心していたが、やがてあきらめた。……当分ヘルメツトを被ることもないだろう。

「そうなれば『ファイナガール』を放棄しなければならぬい……残念だが」

アンダーシャツを着せようとすると、ぴくりとリッキイの身体が反応した。彼女の左腕がゆっくり上がると肩に置かれた彼の右手を探りそこに重ねられる。その二の腕にはすでに癒えた古い傷跡とともに新たに彼女自身によって創られた幾筋かのナイフの傷があった。

——気づいてさえやっていれば……それらを見るたびに彼の心は深い罪悪感で満たされた。

「……リッキイ？」

エリオットは淡い期待を込めて背後から彼女の顔を覗き込む。父の声に彼女はかすかにうなずいたようだったが、その瞳はいまだ何もとらえてはいなかった。

……可哀想に。長い航海のすえにイルスターとの戦いのストレスがもともと不安定な娘の心をとことん崩壊させて

しまったのだ。向精神薬剤も絶え間ない不安と恐怖からくる彼女の精神の消耗を防ぐことはできなかった。娘がいつかもとのように心の健康を取りもどすことがあるにせよ、それはまだずっと先のことになるだろう。

リッキイの唇が動き、ほとんど聞こえない呟きが発せられた。

「……埋メラレル……埋メラレル……埋メラレル……」

無意味な文節の繰り返しと主語の混乱とがいまの彼女の言葉の特徴だった。

「リッキイ？ 誰もお前を埋めたりはしないよ」

「……埋メラレ……深い地層ゴト氷河ハ……侵食シヨウトスル」

「なんだって？」

「高圧二帯電シタ……増殖スル針状結晶体タチ……あーく放電……」

エリオットは溜め息をつく。リッキイの言葉は脈絡なく続いた。

「あーく放電……暴虐ナ速度……速度……衰退シテイク……多様性……多様性ト……運命ノ女神タチノ三位一体……錯乱スル……錯乱スル……属州カラ滴リ落ちル……落ちル……埋メラレル……埋メラレル……トテモ寒クテ……暗イ……暗イ」

父は肩を抱き、娘のこめかみにそっとキスした。

エリオットはクルーザーの動力系統をあらためて綿密に調査した。融合エンジンは動かない。しかし姿勢制御用のイオン・ジェットと船体の回転を利用して『ファイニングール』から離脱することはできる。燃料電池の予備電力で数年のあいだは人工冬眠システムを維持していけそうだった。ふたりでなくひとりだけならさらに長く……、恐らくは十年ほど……、ポッド内の人間の生命を保ち続けられるはずだ。

エンジンの使えないクルーザーには減速も軌道修正も不可能だが、現在の速度と方向が保たれば『グレタ』はクレイドルから数光年以内を通過する。……救難信号を発しながら超高速で飛来する電波発信源がその空域に集まっているシーカーたちの注意を引くことは間違いない。なかにはうまく軌道修正して『グレタ』とランデヴーすることができる『機械』もあるだろう。相対論的時間短縮効果を計算に入ればぎりぎりのタイミングでの救助を期待していいはずだ。

そうしてエリオットは、制御システムの一部を『ファイニングール』本体に移し始めた。もともと星系内でクルーザーを切り離れた後『機械』は自動的に軌道を保ち、あらかじめ設定された時間の後にクレイドルへ向かって帰還するようにプログラムされている。——シーカーが未知の星系

で危険に遭遇し、自力でそれを切り抜けられなかったとしても人類が所有するイシユタル機械を失わないための配慮だ。しかし悪意をもって攻撃してくる他の『機械』に対して十分な防衛行動をとることまではその命令には含まれていない。

架台内部の人ひとりやつと入れる小さなスペースに予備の酸素ボンベを運び込み、エリオットは『グレタ』を送り出した後の孤独な戦いの準備をすすめた。FELで相手と刺し違えられればよし、たとえ駄目でも彼が反撃することで少しでもよけいに連星へと向かう長い軌道の終点近くまで相手を誘き寄せることができらるだろう。

「……正直に言おう。わたしはお前にすべてを語ってはいなかった。確かに近接連星には宇宙船を瞬間的に加速できる重力カタパルト効果がある。しかし同時にそれはしばしばそれに近づく者を破滅させる禁断の罫でもある」

彼は制御卓の上の小さなカメラを見つめながらゆっくりと喋った。恐らくこの暗さではヘルメットの中の自分の表情はほとんどわかるまい……。もしも娘が無事救出され、その精神的な麻痺状態から回復したとき、彼女はこの父親のメッセージをどんな気持ちで聞くだろうか？

「GSN—18202a/bのスペクトル表示は『A5ⅡM2V』——つまり赤色矮星と白色矮星の近接連星だ。そ

して『新矮星』と呼ばれるこの種の連星は数年以下の短い周期で爆発を繰り返す。……赤色矮星からロッシユ・ローブを越えて流れ出る恒星物質によって白色矮星の周囲に作られる降着円盤がときおり急激に重力崩壊することによって生じるこの爆発は通常の新星爆発の千分の一の規模にすぎないものの、間近でその高温の衝撃波を浴びればたとえイシユタル機械といえどひとたまりもない。

——そして現在の軌道と速度なら恐らく『ファインガール』は最接近ポイントでその瞬間に立ち会うことになる」

エリオットは沈黙した。あるいはリツキイは最後まで自分を欺いていた父親を許そうとはしないかもしれない……。「ぎりぎりですり抜けられることを期待していたのだが、エンジンを破壊されたことでそれはもう避けようがなくなつた……。結果としてお前を騙していたことになつたかも知れない。だが最後まで余計な心配をかけたくなかつたのだ。こうなつた以上選択の余地はない。イルスターを自由にしておけば遅かれ早かれ別のシーカーが被害をうけるだろう。彼女らの増殖を防ぎ、可能なら破壊するためにベストをつくすべきだと思うのだ。わたしは『ファインガール』に残つてぎりぎりまで抵抗し、時間を稼ぐつもりだ。

果たしてイルスターが18202星系の危険の性質について理解しているかどうかはわからない。だが星系に十分近く接近してしまえば、奴が畏に気づいて軌道を修正しよ

うとしてもすでに間に合わない。あるいはたとえ知っていたとしても、少なくとも『ファインガール』を解体してその素材を利用することは諦めるだろう。そうすれば将来人間にとつて脅威となる存在が新たに増えるの防ぐことができるわけだ。

——この年齢で宇宙へ出る以上は再びクレイドルへ戻る日があるとは思ってはいない。くわえてこうすることでお前の生存のチャンスを増やし、さらに他のシーカーの航行の安全にささやかながら貢献できるのだからこれは決して無駄死にはない。それ故わたしの死を必要以上になげくこともない……ただ、お前が自分がわたしから愛されていないと今も考えているだろうことがわずかに心残りだ。わたしが妹のマイアをより愛しているかのようにお前が感じているとしたらそれはまったくの誤解だ。もつともそれは自分の心をお前に十分に伝えなかったわたしの責任でもあるのだろう……。

これだけは信じてほしい。わたしはマイアを幸福にしたいと望むのと少しも変わらなずとお前を思ってきた。——言うまでもないことではないか？ お前のママにとつてお前は最愛の娘だったのであり、グレタにとつて大切なものはわたしにとつてもまた同様に大切なものなのだから……。

最後にこれだけは言っておきたかったのだ。お前は自分

ひとりを被害者と感じているようだが、しかしわたしの罪は実はお前たちふたりに対してのものだ。——もしお前的心がもう少しだけ強く妹の気持ちを汲み取るだけの余裕があったなら、母親の代理として生み出された彼女の人生が姉以上に不幸なものであることが想像できたはずだ。わたしはマイアをお前以上に愛していたというわけではない。ただより深い罪の意識を感じていたのだ……」

*

『バルーン』に入れたりリッキイを抱えるようにして彼は気密ロッカーを出た。船体の回転で生じる二分の一Gでさえ足がもつれる。緊張症状の患者はまるで人形同然に素直に強いられた姿勢を取り続け、その人型をした透明な袋に彼女を詰め込み真空の中を移動するのに大した障害はない。しかし冬眠ポッドの与圧テントに入り、娘の身体を『バルーン』から引き出すところにはエリオットは精も根もつき果てたような気がしていた。そろそろ今までの無理の積み重ねがこたえはじめている。

肩で息をしながらヘルメットと手袋を脱ぎ捨てるようにして、彼は下着姿のリッキイに各種の代謝センサーを取りつけた。彼女はオイル循環式のマツトレスに座ったまま皮膚に貼りつけられていく電極にもまったく反応をしめさな

い。しかし彼が彼女をその狭いポッドのなかに横たえ、そしていよいよ最後に厚い蓋をゆっくりと閉めようとしたとき、リッキイの心の奥底に潜む何かが急に意識の表面に現われてきたらしい。

「……い、いやー！」

リッキイは完全な受動性から瞬間的にエネルギーギッシュな興奮状態に移行して、あわてて身体を押えつけようとする彼の腕に激しくあらがった。

「心配ない。——リッキイ。落ち着きなさい」

しかしその目は恐怖に見開かれ、悲鳴をあげて彼女は抵抗した。

「あ、あ、あ、圧搾する……頭蓋骨を粉碎して……」

「そうじゃない、リッキイ。これは冬眠ポッド。ただ眠るだけ——」

「……カ、カインの罪人め！　それがお前の……ば……罰だ。……埋葬されて……お、恐ろしい静寂と孤独のうちに……か、彼は彼女たちのところへ……去ってしまう！」

エリオットの額に冷や汗が流れた。……脇腹の痛みのためではなく、狂った娘の悲痛な叫び声が不意に彼の胸をついたのだ——こうした心の病の患者が時折見せる神秘的な洞察力。

確かにお前の言う通り、わたしはお前を見捨ててグレタとマイアたちのもとへ行くこうとしている。イルスターの脅

威を除くためという一見合理的な言い訳の裏に——じつはすべての軛を投げ出して最愛の人とただ安らかに眠りたいという利己的な欺瞞が潜んでいることを正しく娘は指摘したのだ。リッキイを救うつもりの中の彼の自己犠牲的な決断が彼女から見れば自分を見捨てて父親が母と妹のもとに去って行く最大の裏切りにほかならないということ……。

迷う心で力が抜け、彼は何かにつかれたようなリッキイの腕力に突き飛ばされて床に転倒し脇腹の激痛に悲鳴をあげた。涙でかすんだ目のなかに身体中に張り巡らされたコードを引きずりながらポッドを抜け出し、シールの継ぎ目を夢中で引き剥がそうとするリッキイの姿が見える。苦痛をこらえて跳ね起きるとエリオットは彼女を背後から抱き締めた。——この耐圧性の継ぎ目は引き剥がそうとする力にはひどく弱いのだ。いまシールが破れるようなことがあればふたりとも生命はない。

しかし小柄な娘は尋常でない力で抵抗し、彼はその背で為すすべもなく振り回されるばかり——リッキイは完全に恐慌にとらわれてしまっている。もはや彼の言葉はまったく届かない。エリオットは長い髪をつかんで上体をのけぞらし渾身の力を振り絞ってリッキイをテントの透明な内壁から引き離すと正気に戻すべくその身体を手荒く揺り動かした。今や娘も父親も共に絶叫していた。彼の腕をふりほどこうとしてリッキイの膝が脚といわず腹といわず目茶苦

茶にけり上げてくる。目に突き立てられようとした爪をか
わした彼の頬が引き裂かれ、暖かい血がほとぼしるのがわ
かった。思わず数歩引き下がり、身体の底から込み上げて
くる悲しみと怒りにまかせて拳を握り締めると彼は娘の顎
を力任せに殴りつけた。

急にぐったりとなった彼女をエリオットは抱きとめ、そ
と床に横たえた。脇腹の痛みは耐え難くがつくりと膝を
つくと父は娘の傍らに倒れ込んだ。

——まるでふたりの間柄を象徴するようだ。あえぎ苦痛
にもだえながらエリオットは考えた。心では娘のことを思
いながらも逆にまるで憎しみに満ちた有様で彼女を打ち据
えた……。彼は歯を食いしばって身を起こし、昏倒した娘
の脈を調べた。——どうしてあんなに激しく殴ったりした
のだろう？

リッキイは青白い顔をして死んだように横たわっていた。
苦痛をこらえ、切ない思いでその上体を抱き起こす。頬の
傷から一筋血がしたり落ち、娘のはだけた白い胸もとを
赤く汚した。

そしてエリオットはいつのまにかコンソールの警告灯が
すべて真っ赤に点灯していることに気づいた。

モニター画面に噴射光を認知したことを意味するコンピ
ューターからの警告……。どうやらアラートを聞き損ねた

らしい。

いつたい何時から？ ふたたびミサイル攻撃か？ それとも……。

苦痛をこらえ、意識のないリッキイの身体をポッド内のマットレスに乗せて蓋をロックすると、エリオットはエア・テントをよろめき出た。

モニターの中央に巨大な輝きがある……。こんなに早くあいつはエンジン修復に成功したのか？ もしもそうならすでに彼らの命運はつきたも同然だった。加速能力を取りもどした相手は瞬くうちにFELの有効範囲に迫ってくるだろう。

残された時間を知るためにコンピューターの自動測定の数値を呼び出したエリオットは、しかしそれを見て首をひねった。……あまりに加速が大き過ぎる。長波長帯域でのドップラー・レーダーの測定は必ずしも正確とは言えない。だが同時に行なったスペクトル解析の結果も信じられぬものだった。——彼はもう一度、各輝線の紫方向へのシフトの比率をコンピューターに計算させ、相手の加速度を割り出そうとした。だがその結論を示すモニターの数値は前と変わらず、彼はしばらく我が目を疑ったままそれに眺め入った。

「……『ニコンマ九G』？！」

——とうてい考えられない加速度だ。どれほど改良され

ていようと核融合エンジンの出力には物理的な上限がある。ティプラー・フォンノイマン機械の巨体にそれほどの大きさの加速を与えることができるはずはない。そもそもそんな力が加われば船体構造そのものがもたないだろう。

彼は混乱しながら画面をぎりぎりまで拡大して詳細にその光を観察した。

……ラム・スクープの融合光がない。そしてその噴射光はシンメトリーなものでなく、しかも大きく時間変動している。どうやら相手の推進プラズマは正常なラム・ジェット燃焼によるものではないらしい。いったい何が起こったというのだろうか？

エリオットは思いがけない事態の変化に戸惑い、コンソールの前に立ちつくした。

三G近い加速度？ 考えられる可能性はひとつしかないが……。

彼は脇腹の痛みを忘れていた。ほんとうにそうなのだろうか？ エリオットはその結論に飛び突きたい自分自身を諫めた。あと五時間以内に彼がいま想像したことが正しかったかどうか分かる。それまでは根拠のない希望にすぎるべきではあるまい……。

エリオットは息をつめモニターに流れる数字を見つめた。すでにたがいの距離は三十万キロを切っている。彼はクル

レーザーの電磁的な固定装置以外のロックをすべて外し、ス
イツチひとつでいつでも『グレタ』を切り離せるようにし
てイルスターの接近を待った。……イルスターとの距離が
五十万キロを下まわってからずっと、彼はこのスイツチを
押すべきかどうか迷っていた。一度『ファインガール』を
離ればもはや『グレタ』は無力に漂うだけだ。できるな
らそれがクレイドルに確実に向かうよう『機械』の速度ベ
クトルを確認するための時間がほしい。しかしいつぼうで
切り離しのタイミングを逸せば永久にチャンスは失われて
しまうかも知れない。

ほんらいならすでに幾度かFELの攻撃があってもいい
はずなのに相手はただただ猛烈な速度でこちらに向かって
突進してくるだけだった。このままでいけば後わずかで
『ファインガール』を追い越してしまう。——とはいえ、
もしも彼女がふたたびレーザー帆のような奇策を使ってく
るつもりだとしたら……。

エリオットは生き残った僅かなテレビカメラで相手の姿
をあらゆる波長で捉えられるようセットし、妙な動きを見
逃さないよう全身の神経を張り詰めて見まもった。

けつきよく最後まで『ファインガール』への攻撃は行な
われなかった。エリオットがモニターを見つめるうちにイ
ルスターの巨大な船体はますます大きくなり、恐ろしい速

度で迫り、やがてまばゆいプラズマを閃かせて画面から消えた。ふたつの『機械』は毎秒五百キロ以上の相対速度と百キロ以下の距離ですれ違ったのだ。

エリオットはしばらくの間、姿勢を崩すことができなかった。十秒ほどもたつてからようやく硬直した身体をほぐすように大きく息を吸う。わずかに百キロ……。相手のスクープ・フィールドが働いていなかったことを彼は銀河中のマシンに感謝した。もしもその強大な電磁の翼が一触したら、苛烈な磁場変動にともなう抵抗熱によって『グレタ』は中身もろともこんがりとローストされていたはずなのだ。震える指ももどかしく彼はモニター画像をスロー再生した。

……イルスターは燃えていた。

その炭素結晶の船体に穿たれた無数の穴から青白いプラズマを吹き出し、船体の後半分は吹き飛んでほとんど形を成していない。——あの異常な加速も当然だった。自らの内から燃えあがる地獄の業火に焼かれながら、その呪われた星は狂おしい加速度で破滅への軌道をまっしぐらに驀進していたのだ。

明らかにシャフトのなかの重水素融合反応がコントロールを失い暴走したのだ。連鎖的な核融合爆発を繰り返しながら、それは太陽になろうとしていた。

……だが、なぜ？

すべてのカメラの捉えた画像を丹念に調べあげたあげく、エリオットはあるひとつの映像が疑問に答えてくれているのを知った。そこにはイルスターから振り落とされ、半ば燃えながら分解していこうとする数匹の蜘蛛たちが写っていた。静止した奇妙なポーズで触手を広げたその機械たちの解像度限界近くまで拡大した表面に、エリオットはあの見慣れた金属質のあばたを見つけたのだ。

——ストレンジレット！

あれは取りつき、そして増殖していたのだ。いったい何時イルスターはそれを自らのスクープ・フィールドに拾い上げたのか？ エリオットは当惑した。ストレンジ・クォークを含む物質は弱いプラスの電荷を帯びているから水素イオンに反応するよう設計された電磁スクープによってラム・ジェットの内側に引き込まれることはありうる。しかしそれは磁界のなかではどんな反応にも加わることなく、最終的に噴射プラズマとともに宇宙空間へと排出されるはずなのだが……。

恐らく何かの奇跡的な偶然で一次反応の後に生成される重水素と一緒に予備燃料回収システムがそれをたまたま捕えてしまったのだ。ストレンジレットの粒子は核燃料貯蔵タンクに取り込まれて隔壁に付着し、彼女を次第に侵食していったのだろう。やがてさらにその外側の制御システム自身をも蝕み、ついにはメンテナンスに従事する蜘蛛たち

にまで感染した……。そうして制御装置のほとんどを破壊された融合シャフトは暴走を始め、すべての重水素を一度に燃やし始めたのだ。

それはあらゆる物質に伝染しながら、まるでウイルスそのもののようにあのイルスターの船体を蝕んでいった……。もしも気がつくのが遅れて外装パネルの汚染をあのままにしておいたら……。彼はいまさらのようにぞつとした。

「どうやら、われわれはついてきているらしい。……リツキイ、きつとお前も救いだされるに違いない」

エリオットは鎮静剤を投与され冬眠ポッドのなかで眠っている娘を振り向いて、安堵とともに深い疲労を含んだ声で語りかけた。

「——わたしもお前と一緒に行くことにしたよ。この幸運がこの先もわたしたちとともにあるなら生き延びることもきつとできるだろう。そして無事クレイドルに戻ったなら……約束しよう、わたしに残された時間を今度こそずっとお前のそばで過ごすことを」

*

代謝センサーの各数値と時間変動を示すモニターグラフをエリオットは見つめていた。人間を冬眠状態で保存する

ためには幾つもの化学物質を必要とする。血漿凍結防止タ
ンパク、細胞膜安定剤、代謝抑制物質……。人工冬眠に入
るプロセスは目覚めるときそれよりはるかに複雑であり、
予想外の致命的トラブルが生じる可能性もまた高い。多量
の複雑な高分子化合物が脳を含む全身に行き渡る結果、娘
の心の病が取り返しのない影響を被る可能性は否定で
きない。最初に発見された降圧剤レセルピンが鬱病患者の
自殺率を増加させた例もあるのだ。

しかしリツキイの頭に接続されたスクイドセンサーが異
常を告げることはなく、見守るうちにその眉根に刻まれた
険しい皺も次第に解かれ、眠りが深まるにつれて彼女の内
面の苦悩もまたゆっくりと癒されていくようだった。

体温は順調に下り続け、やがて氷点下二・五度℃で安定
する。脈拍は三十分間に一回、呼吸は九十分間に一回、そ
して脳波はゆつたりとした微弱なデルター波……。これから
数年間、彼女は死にも似た過冷却状態に守られたまま静か
に眠り続けることだろう。

——今はただ眠りなさい。フレドリカ。そして明日すこ
やかな娘となって目ざめたなら……。どうかわたしを許し、
わたしにキスをしておくれ……。

彼女のポッドが正常に作動していることを最終的に確認

するとエリオットはテントの外に出て、今度はマイアたちのそれに歩み寄った。それからまるでふたりが正常な人工冬眠状態にあるかのように正規の手順で明かりの消えた表示パネルをチェックし、そしてその無意味な身振りのあとで死者たちの顔に彼はじつと眺めいった。

数十分ののち自分の冬眠ポッドの周囲に張られたエア・テントの前でエリオットは緩慢な、しかし習慣となった無意識の動作で生命維持装置を点検していた。……いまや底知れない疲労が自分のうえに覆いかぶさっていて冬眠状態に入ったら再び目覚めるときがこないような予感さえある。体力も気力も、あまりにも無理に無理を重ねていた。

だがたとえ二度と必要とすることがなかりうと自分の宇宙服の状態は完全にしておきたかった。……酸素の残量が少ない。自らに鞭打ってボンベの交換のために彼は備品室に入った。

疲労のためか指が滑り彼はボンベを取り落とした。それは船体の回転から生じる二分の一Gの重力に引かれて床に弾み、暗がりへ転がっていった。ため息をつくときエリオットはそれを捜すために部屋の奥へと進み屈みこんだ。

不意に眩暈が襲いバランスを崩して彼はその場に倒れ込んだ。ゆっくりとした転倒だったが脇腹の激痛に息が止まった。涙で霞む目を瞬きながら身を起こしエリオットは奥

の壁にもたれてひと息つく。そのとき――。

「ギャーアアアアア……ッ！ー！」

全身の血液が凍りついた。……数分のあいだ身動きひとつできないほど茫然自失としたのち、ようやく彼は麻痺した手足を励まして身を起こした。恐る恐るあたりを窺う。いまだ動悸は納まらず、こめかみを一筋冷たい汗が流れた。誰ひとり何一つ動くことのない沈黙のなかで、その恐ろしい突然の絶叫は彼の衰弱した神経をぐさりと貫いたのだ。

……いつたい？

ゆつくりと立ち上がり背後を振り向く。――目の前には壁。脇には非常用エアロックがあった。彼はヘルメットの明りをそこへと向けた。黄色く塗られた幅の狭い扉の上部に小さな窓があり、その中で厚い霜がきらめいていた。エリオットは扉に近づき、その小窓をつくづく見つめた。船室の空気が抜けてすでに数ヶ月。真空のなかで霜はそんなに長くは存在できないはずだった。……この小さな空間はまだ与圧されているのだ。

彼は両手を壁につきヘルメットをためらいがちにそつと扉の表面に触れさせた。

「ギャーアアア……アアア……オウオツ！」

……それは鳴き続けていたのだ。恐らく人間たちの動く気配を振動で感じて何ヶ月も前から。しかし彼のヘルメットがたまたまその壁に接触するまで、助けを呼ぶその枯れ果てた声を真空が完全に遮断していたのだ。

「……ダークマター！」

呆然として彼は呟いた。夢中で厚い霜で縁取られた窓ガラスをのぞく。動揺した彼のヘルメットのちらつく明りのなかにプラスチックのケースの散乱した床が見え、針金のように痩せこけた影がおぼろげに動いた。

「四ヶ月以上も……」

食物の匂いのしみたプラスチック・ケースの底まで齧りとり、たぶん窓の霜で渴きを癒しながら、それは暗闇のなかで生きていたのだ。

思わず目頭が熱くなり、気がつくと彼はドアの取っ手を握り締めて渾身の力で開こうとしていた。……もちろん内部から圧力がかかっているかぎりオート・ロックされたドアは開くはずもない。

——しかし、なぜ？

思いもよらない出来ごとに混乱する心のなかで彼は自らに問いかけた。

……マイアと一緒にではなかったのか？

全身の真っ黒な毛並みのために『ダークマター』と名づ

けられたその雄猫をなぜカリツキイは嫌っていた。ダークマター自身もあきらかにそれを察していたのだろう。決して姉になつこうとはしなかった。そしてリツキイがナビゲーションの当番につくときにはそれは何時でもマイアとともに冬眠カプセルでの眠りにつくことをエリオットは知っていた。当然彼女と運命をともにしたものと今の今まで思っ込んでいたのだが……。

——それとも。

そこまで考えて恐ろしい可能性にエリオットは思っていた。……あの隕石群が

——つまりマイアは起きていたのだ。……あの隕石群が『ファインガール』を襲ったとき、急速に低下する気圧のなかで猫を予備エアロックに放り込み非常用食料とともに扉の内側に閉じ込めた人物。——それはマイア以外の誰でもありえない。そして生命維持システムのダメージによる夫ヘンリーの死を確認した後、マイアはまず最初に父親ではなく自分の姉を目覚めさせたのだ……。

エリオットは青ざめた顔でゆつくりと振り向いた。

簡易エアロックを与圧する時間さえも果てしなく長く感じる。……あわただしく気密ロッカーに飛び込んだエリオットはしかしマイアの真紅の宇宙服の前で一瞬ためらい、それから震える手でそれを探った。

やがて彼は半ば予期し、半ば恐れていたものを見つけた。

——細いパイプの接続個所に塗られた黄色いペイントの表面のごく小さな亀裂……。バルブが動かされた証拠だった。その酸素供給バルブを締めたまま宇宙服を着用することは致命的行動であり、気圧ゼロの場所へと踏み出すべくふたりの人間がお互いの装備をチェックするときそうした異常を見落とすことはまずありえない。

そしていまや誰の手が密かにレンチを握り、はつきりと殺意をもってそれを固く締め付けたのか……。彼には明らかだった。

いつのまにかエリオットはリツキイの冬眠ポッドの傍らにいた。蒼白の顔で穏やかな寝顔に見入る。……。まるであどけない少女が微笑むように彼女は眠っていた。その満ち足りた表情は父親である彼でさえ初めて見るものかも知れなかった。

——リツキイ！ リツキイ！ それほどまでにお前は……？！

誰のためとも知れない不意にわきあがってきた憐愍にフェイスプレートに涙が滴った。彼の指は娘の顔を覆う断熱ガラスの表面をさ迷いやがてそれはポッドの制御パネルに行き当たった。……。フェイルセーフを解除し小さなスイッチを切つて酸素の供給を断てばリツキイは眠りながら死ぬ。——何の苦痛もなく。

惑いと絶望とに顔を歪め、彼はつぶやいた。

——わたしに知られることはないと確信していたのか？
そうだろう……。お前はダークマターがヘンリーのポッドの中だと思っていたのだから！

人間よりもずっと短いその寿命を少しでも延ばすために、しばしばマイアは自分の当直のあいだもそれを夫とともに冬眠させていた。おまえは妹にあえて尋ねなかったのに違いない。ダークマターもまたヘンリーとともに死んだのかとは……。そしてマイアもまた、やむなく咄嗟の機転でエアロックにそれを閉じ込めてあることを最後までお前に言いそびれたのだ。

だがそれは生きていた。マイアの死体がポッドに入れられ凍結されて事故の偽装が完成し、そしてわたしが目覚めてからもずっと……。数ヶ月にわたる『イルスター』との戦いの間、備品室の壁の後ろでその恐ろしい犯罪を告発するしゃがれた鳴き声を上げながら——。

『安全装置↓解除』。

パネルの文字がいつのまにか変わっていた。……。わたしがやったのか？ すでにそれさえわからなかった。ぼやける目で表示を確かめる。酸素は——いまだ『ON』。しかし軽い接触で『OFF』になるはずだ。

彼の指が激しい内心の葛藤のために痙攣した。

——しかしわたしにこのスイッチを切る資格があるの

か？ お前をそこまで追い詰め、その殺意を産み出すことになったそもそも最初の決定を下したのは、ほかならぬ自分ではなかったのか？ その一生のほとんどを妹であり同時に母であるものに父親を奪われる恐れとともに過ごしてきたお前。それが誰にも知られずにその存在を除く絶好の機会を偶然与えられたと知ったとき、はたして別の選択をする余地があつただろうか？

あるいはお前は誰にも知られぬまま静かに狂気に蝕まれていたのかもしれないのだ。宇宙空間のもたらす危険への絶え間ない緊張がお前の精神のバランスを、こうした事件が起ころずつとまえにすでに崩していたのだとしたら……。

——だが。

彼の心にふたたび冷たい疑惑が忍びこむ。あるいはそれさえもお前の思惑の一部かも知れない。あまりにもお前の寝顔は穏やかだ。ひよつとしたらお前はわたしの前で心の病を装っているだけではないのか？

わたしは覚えている。幼いお前は自分にとって邪魔な妹を陥れようとして幾度か子供じみた奸計を仕掛けたことがあった。そしてわたしはそれらを見破るたびに厳しくお前を叱咤しなければならなかった。

——いまとなつてはつきりわかる。わたしは密かに恐れていたのかも知れない。娘のなかに母から譲り受けた神秘的で力強い素質を見るかわりに、錯綜した邪悪さ——他な

らぬわたし自身の影に出会うことを……。明るく輝く星々の間にあつてその運命を支配しながらもそれ自身は目には見えない暗い存在を見ることを――。

……方が一にも自分の行ないを知られたときのために、狂気のうえでの殺人が罪にはならないことを計算したうえで彼女が自分に対してそれを装ったのではないかという疑いを、それゆえわたしは今捨てることができなくなつてしまっている……。

しかしそれでも――リッキイの寝顔は何一つ罪を知らない童女のように見え、エリオットの脳裏にはふたたび遠い昔のあの小さな手の感触が蘇つていた……。

気がつくと彼は冬眠ポッドの間の床に横たわつていた。

——自分はあるのスイッチを押してしまつたのだろうか？
記憶は空白であり底知れない疲労が夜の闇となつて彼の明瞭な意識を閉ざそうとしていた。

……酸素の残量は？ 果たしてわたしはボンベを交換したのだつたらうか？

そしてダークマターは？

真空状態のなか宇宙服のままで一人眠るのは死につながる愚行だった。しかし眠りはエリオットの四肢に鉛のように重く取りつき、もはや彼は手足を動かすことすらできなかった。

——あまりにも自分は疲れ切り弱っている。ほんの少しだけ眠ろう。時間はいくらでもあるのだから。ともかく今は……。

そう、ともかく今は……これ以上の力は……

最早ない

了

著者紹介

高本淳 (Jun Takamoto)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/j-takamoto.shtml>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_1/darkmatter/index.shtml

著作：時代遅れのラブソング

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_1/lovesong/index.shtml

ボルツマンインターセクション

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/takamoto/boltz.html

あるいはドワーフでいっぱい宇宙

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/takamoto/dwarf.html

天の炎

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/anthology/mirror/takamoto/index.shtml>

シェアードワールド：落下前

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/shared/before/scenario.shtml>

シェアードワールド：落下当日

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/shared/that/scenario.shtml>

シェアードワールド：落下後

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/shared/after/scenario.shtml>

シェアードワールド：悪い明日…

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/shared/other/scenario.shtml>

中央海嶺 12/24/2005

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/shared/that/ridge.shtml>

ダークマター shortstory: "Darkmatter"

2002年4月8日 第1版第1刷発行

著者 高本淳 (Jun Takamoto)

発行人 中条 卓

発行所 アニマ・ソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine/>

制作 松谷 和加子 (電脳工房りっくらく)

表紙 三上 央子 (電脳工房りっくらく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載を禁止させていただきます。
希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。